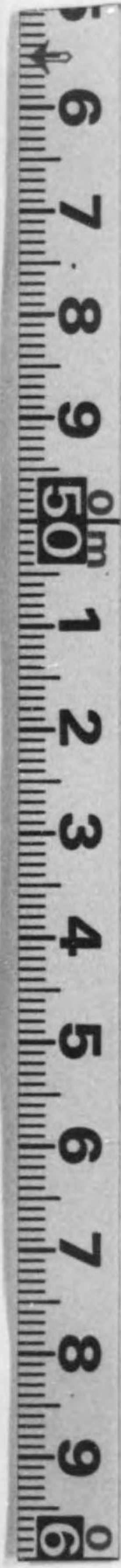


910. 2-F67-4ウ



1200500754243

1102
F67
4



始



15

910.2
F67
4



藤田 徳太郎 著

民族文學の歴史

愛國新聞社出版部發行



自序

民族文學といふべきか、國民文學といふべきかは、始に考へた問題であつた。併し國民文學といふよりは、民族文學といふ方に今自分の志向してゐる純粹の觀念が強く含められてゐる。國民文學と云へば、包容する範圍は廣くなる。併し此所で自分の求めてゐるもの、描かうとしてゐるものは、むしろ狭くはあるが強く一筋に流れてゐる血潮である。それ故、その主體となるもの、中心となるものをとつて、これを民族文學といふことにしたのである。

此の民族文學のあらゆる屬性を分析して、説き記さうといふのは、今の自分の目的ではない。わが民族文學の歴史を通して流れてゐる一貫した中心を求め、そこに、民族文學の範圍の内では最も普遍的な勢力を持つてゐるが、その外のものと比較する時、最も顯著な特色として、これと峻別せられる重要な性質を見出して、わが民族文學が世界文學の中に聳立する立場を置かうとしたのである。

そもそもわが民族文學の世界性といふのは、世界的普遍性の中に、民族文學を妥協せしめることではなく、民族文學の醇乎たる特性の中に世界文學を歸屬させる意味でなければならぬ。かくて、わが民族文學が誇るべき孤高の操節を保持する限り、世界文學に寄與すべき民族的特性を失ふことなく、その求めるものを維持する事が出来るのである。それ故に、われらは、民族文學の純粹性を追求し、持続する必要がある。此の點、世の人の、わが國の文學の世界性に對する考と、聊か見解を異にするものがある。

此の立場から、此の目的をもつて、本書は書かれたのである。かつて、芳賀矢一先生の日本精神と題する英語講演を、佐藤春夫氏の譯されたものを讀んで感動した。『日本文學の最も重要な特徴は何であらうか、我々の文學史を瞥見するとき、我々は少くとも二つの異つた特色を發見する。それは凡ゆる形式の文學にも、また、如何なる時代の文學にも現れてゐる要素で、その第一のものは、天皇に對しての忠義であり、第二のものは、自然に對しての愛である』とて、各時代の忠義の文學を説かれ、終

に『云ふまでもなく、如何なる時代の我々の文學にも反映してゐるこの國民的統一と古い忠節の復歸が、新しい日本の長足な進歩發展の原因であり基礎であるのである』と結論して居られる。

わが文學における自然に對する愛については、既に多くの人々が説いてゐるところである。併し、他の最も重大な問題については、多く説いたものを知らない。それは學者の怠慢であると共に、時代の罪過でもあつた。

併し、今本書を書くことを得せしめた時代の轉換を幸福とし、此の記念すべき時代に生きつつある自分を喜ぶものである。

二千六百年四月

藤田徳太郎

民族文學の歴史

目次

一	概説	民族文學の意義と本質	一
一	天皇の御文學	七
二	明治天皇の御文學	七
三	日本武尊	四
四	柿本人麿	六
五	山上憶良	四
六	山部赤人	四
七	大伴家持	五
八	菅原道真	五

目次

一

九	在	原	業	平	二
十	紀	貫	之
十一	紫	式	部
十二	清	少	納	言	...
十三	西			行	...
十四	慈			鎮	...
十五	源	實		朝	...
十六	藤	原	家	隆	...
十七	日			蓮	...
十八	宗	良	親	王	...
十九	北	島	親	房	...
二十	吉	田	兼	好	...
二十一	世	阿	彌	元	...
清				清	...

二十二	宗	祇	一九				
二十三	芭	蕉	二四				
二十四	近	松	門	左	衛	門	二九
二十五	井	原	西	鶴	三四
二十六	契			沖	三九
二十七	賀	茂	真	淵	四三
二十八	本	居	宣	長	四八
二十九	上	田	秋	成	五五
三十	燕			村	六一
三十一	瀧	澤	馬	琴	六六
三十二	平	賀	元	義	七一
三十三	新	井	白	石	七五
三十四	賴	山	陽	七九

三十五	佐久良東雄	一八四
三十六	伴林光平	一八八
三十七	平野國臣	一九四
三十八	野村望東尼	二〇一
三十九	橘曙覽	二〇九
四十	香川景樹	二一六
四十一	河竹默阿彌	二二七
四十二	落合直文	二三三
四十三	正岡子規	二三八
四十四	大和田建樹	二四〇
四十五	芳賀矢一	二五一
四十六	森鷗外	二五九
附録	年表	二六七

概説

民族文學の意義と本質



わが國の政治も宗教もすべて 天皇が中心であらせられ、根本は 天皇より發
 動せられてゐる。文化一般も亦さうであつて、文化の一部たるべき文學も、自然そ
 の例外であるはずはないのである。従つて、天皇の文化上の御業績、御活動とい
 ふものは、その時代の文學を興隆せしめ給ひ、或はその御影響を永く残さしめ給ふ
 まことの軌範たるべきものであつた。或は又、天皇御自身は、さほど御作を示し
 給はなかつとも、天皇の御人格にふれ奉り、天皇の御存在が、自然と國民達に感通
 するところあらしめ給うて、これが文學となつて表現せられる源をなす、といふこ

民族文學の意義と本質

とき場合も少くないのであつて、即ち直接的意味か、或は間接的意味かのいづれかにおいて、天皇がわが國の文學の中心であらせられ、又、根本であらせられたと申し奉る事が出来るのである。

和歌は、所謂敷島の道であつて、わが日本の歴史に添うて、その文學的方面を、一筋に長く貫通してゐる民族詩である。和歌の歴史は、民族文學の中樞たるべきものであると云つても差支ないほどの重要な意義を有する。和歌が多少の盛衰を示してゐるにもかゝらず、とにかく、わが國の歴史の長さに伴うて、今日まで、國民の代表的文學たるの權威を墜さず、民族詩たるの地位を失はずして、今なほ隆盛を極め、その聲價を維持し、ますます國民の間に普及してゐる事實は、その價値が既にわが國民の骨髓の間にしみて、批判を超越した絶對の位置にある事を示すものである。

従つて、和歌は、天皇の御製を拜誦し奉るのをはじめとして、いかなる國民も詠作して、その詩情をこれに託すべきであり、かくて、和歌は、あらゆる時代のすべての

階層にわたる國民感情を含めて、悠久たるわが國の歴史の一部を形成し來つたのである。さうして、和歌の歴史を考へる時、これが常に直接に天皇に關係し奉る所多く、その思召により、和歌の歴史の進展してゐる事を見る。それと同時に、和歌が眞に時代に生きて中樞的位置を占めてゐた時代はいふまでもなく、幾多の文學の種類が現れ來つた後においても、和歌の歴史の展開に伴うて、その影響を受けつゝ文學の變遷してゆく場合が少からずある。例へば、能樂をして幽玄なるわが代表的藝術の位置に高めさせた世阿彌元清のすぐれた藝術論、戯曲論の根本思想には、和歌の方で論じられた文學論の影響を受ける所が少なくないと認められ、又、その作品の中に、和歌的表現、和歌的理念の含められてゐる事も、尠くないのである。

江戸時代の如く、俳諧の勃興した後においても、文學思想を指導してゐたものはやはり和歌であつて、歌人と云ひ、俳人と稱し、その詩情を託する形式は、種類を異にしてゐても、和歌は俳句の方の影響を受ける事は極めて僅少であつたにかゝはらず、俳句は、常に和歌に求める所が多かつたのである。江戸時代の俳諧の道におい

て最初に出でた松永貞徳は、俳人であるとともに歌人でもあつた。賀茂真淵の門の加藤美樹に國學を學び、和歌は平安四天王の一人と云はれた上田秋成は、俳諧の方にも詳しく、俳諧の切字を研究した也哉抄の著がある。かやうに、兩者の交渉が特に行はれてゐたのであつてもとより無縁の藝術として發達し、來たものではなく、むしろ内的外的の關係には密接なるものがあつた。さうしてその場合にも、文學の歴史の先輩として、和歌は常に指導的立場にあつて、此の文學の後輩を教へ覺らせる所があつたのである。

かやうな主導的位置を長く占めてゐた和歌は、天皇の御製を始め奉り、國家的なものとして結びつく事において、さういふ立場が一層意義づけられる。これを國民の作について見ても、國家的な精神を昂揚する事において、詩情の發露を見る時、それは常に和歌の形式を取つて表出せられる。又これを反對に云へば、和歌の形式をもつて表出せられる文學には、國家的な精神の昂揚に伴ふ、激刺たる積極的意志の籠められる可能性があるが、他の形式の文學においては、さういふ可能性が和歌

に比して乏しいと云はなければならぬ。俳諧の如き、それが、一つの民族精神を表出する詩形たる事は否定出来ないが、しかも、此の俳諧の形式において表現せられるものは、何か消極的な、退隱的な、獨善的な、個人的な、國家全體の活動に連なる所の少い、別種の面であるかの如く思はれる。それが所謂俳人氣質とも云はれるもので、少くとも、國家的精神の基調において俳句の受け持つものは、和歌に比して、その質、量ともに劣る所がある事は否定出来ないのである。私は、勤皇志士と俳句との連關について、多く知る所がない。例へば吉野時代の如き戰亂の際において、國家的意義から、正邪の根本精神を明かにし、その清明なる勤皇の志向を以て吉野朝廷に馳せ參する時、一時の艱難勞苦を凌いで、その鬱積した、情の精神が表現を求め、めるものは、必ず短歌の形においてであつた。又幕末維新の志士が、あらゆる辛酸困窮に身を處しても、常に烈々たる意氣と激刺たる精神とを以て、その行動の根本精神を失ふ事なく、むしろ、此の信念あるがゆゑに、いよいよ決意の強固にして志氣の烈しきものあるを見る時、おのづからにしてその心境の表現せられるに當つて

は、やはり短歌の形を以てせられたのである。端的に國家的精神の集中凝結せられる文學形式は、他のすべての種類ではなくして、常に此の短歌の形式を求めらるゝのである。それは上代以來常にさうであつた。短歌は民族精神とともに生れ、民族精神とともに永く傳へられるべきである。さうして、わが民族精神の最も崇高なる仰望は、天皇を中心となし奉る時に發揮せられるのであり、すべての精神活動の中樞は、深く此の國體の本源に結束せられてゐるが故に、文學の最高表現が和歌といふ形式に結びついて、わが國民精神を震撼する時、それは必ず、天皇に忠誠を致し、國家に奉公の至情を捧げる意義を持つものでなければならぬ。此の事は、萬葉集以來維新志士の作に至るまで、必ず然りであつて、此の最高表現を持つか否かが、むしろ時代の精神的緊張弛緩の如何を評價する標準となると云つてもよいほどである。民族文學の根本意義も亦、當然此の點になければならず、以下に要説せられる文學の歴史は、常に此の意義を見失はず、此の主眼となる契機を複雑多岐なる群落の間に求めつゝ、進行して行くのである。

かやうに、わが文學における國民の精神の在り方、その心の働きの爲方については、その最も根本となるものを明瞭に指摘出来るのであつて、これを中心としつゝ、次第に様々の輪廓を描いて、その周圍の縁邊が遠ざかりつゝ、多くの種類の文學や幾多の作家の作品を存在せしめるに至つてゐる。

民族文學の意義を、かやうに解釋する時、文學の中心として、天皇のまします事は、わが國の文學の光榮でなければならず、これによつて、文學を價值づける意義も明かとなつて來るのである。こゝにおいて、文學の上における、天皇の御業績は、一層民族文學の意義と價值とを闡明ならしめる爲めに、極めて重要な御存在でなければならぬ。此の點について、更に謹んで記す事にする。

二

上代において古事記編纂の動機が直接には、天武天皇の思召に出で、日本書紀も亦、元正天皇の勅命を奉じて、舍人親王、その他の方々が撰修せられたものであ

る事を注意しなければならぬ。かやうにわが國の歴史の根本をなし、従つて國體の淵源をうかゞふ書が、いづれも天皇の大御心より出でてゐる事は甚だ重大なる事實である。それは、わが國の文化が、天皇の大御心によつて推進せられて來た顯著な實例を示してゐるばかりでなく、上古のさうした方法が、後代に下るに従ひ、文化の進運に伴つて、方向の歸趨に迷ふほどの複雑多岐なる状態を現出し、採るべき目標の確實なるものを見失ふほどに、混迷した分裂を來たす時、明瞭なる基準を與へる原始の態度を教へ覺して、その行く手を、清く明かに照らし出す道標となるからである。それ故に、混亂と濁流との中に、惑溺する時、わが日本においては、常に此の水上の清流に遡つて、新しい秩序を見出す事が可能なのである。これは、實に日本の文化の榮譽であり、日本の歴史の權威であつた。

此の事は、上代文學を、記紀とともに代表する萬葉集の場合においても同じである。萬葉集を以て勅撰集とする考は、まだ確實ではないが、少くとも此の説は、後の勅撰集の盛んな時代における、撰集の權威を萬葉集にも求めて、これに勅撰的意義

を賦與しようとした國民の要望に出てゐる事は否まれない。萬葉集が、或はその一部が勅撰集であるか否かに拘らず、さうした考の早く行はれてゐる事實の方が大切であり、又さういふ事實を存在するに至らしめた人々の心理が重要な意義を持つ。わが文藝も亦、天皇の權威によつて存在の意義を有するに至る事を、古く人々は求めてゐたのである。かくて、勅撰集の出現が、天皇の思召を臣下が體し、撰定の業を遂行する事によつて、可能とせられ、又存在を觀るに至つたのである。

たとへ萬葉集が勅撰集ではなくても、その卷頭に雄略天皇の御製を奉記し、ついで舒明天皇の御製を始めまつり、天皇の御製や皇族の御歌を多くそこに見出す事が出来るのは、決して偶然ではない。さうあるべき意義をもつて萬葉集は編纂せられたのであり、又上代の和歌は、必ずさうなければならなかつたのである。勅撰集が、單なる形式的な奉命に終るのではなく、天皇の御心によつて撰集の實際が行はれた場合が少くない。勅撰集の第五代たる金葉集は、白河法皇の院宣によつて、當時の新しい傾向の歌人を代表する源俊賴の撰んだものであるが、そ

の撰定して捧呈したものが、法皇の御氣に召さず、却下せられて改撰を命じ給ふ事再度に及び、遂に第三度の撰集によつて漸く奏覽を嘉納し給うたのである。その間に内容は幾多の變化が加へられ、歌數は次第に少くなつて純化せられて行くが、それによつて古い時代の作品が除かれ、新しい時代の意義を持つ歌が加へられて行く。即ち、俊賴のつた稍妥協的な、以前の古い作風に捕はれてゐる傾向は、白河法皇によつて一層進歩した進路に導びかせ給うたのである。その結果、所謂古今風と云はれてゐる歌風は、既に長い間の流行によつて新鮮味を失ひ行き詰りとなつてゐたのを、此所に新しい歌風へと發展せしめ給ふ通路を開かせ給うたのである。かくて、和歌の歴史は閉塞せられる事なく、流通の路を見出す事が出来るに至つた。これ實に、天皇の御心に出てゐる所が少くない。新古今集の場合でも同じであつて、これでは特に、後鳥羽上皇の御熱心なる和歌を好愛し給ふ御心より、その改定刪修の業は、實に頻繁に行はれ、上皇御自身これを監督指示し給うたのであるが、遂に隱岐に遷幸し給うた後、御自ら最後の撰定を行はせ給うた。これが

隱岐本新古今集と云はれる本であつて、これに至つては最も歌數少く、即ち、上皇の思召における最も純粹の度の高い内容を持つものである。かくて新古今風と稱せられる新鮮なる歌風が樹立せられ、權威を以て此の歌風の廣汎なる普及と影響を可能ならしめたのである。かやうに權威ある勅撰集においては、撰者の擅まななる撰定に任せられたのではなくして、天皇の思召を拜する事が多大であつた。それ故に多くの歌人が勅撰集に入集し、御覽に入るの光榮を期待して、争つてその作品を差出し、入集するの喜びを望む事が切なであつた。従つて、さういふ勅撰集の意義が失はれて、形式化し、皇室も式微まします室町時代に至つて、その事が絶えたのもやむを得ない時勢の推移であつた。

さればこそ、皇政復古し、維新の大業成就して、親政の御代となるや、明治天皇の思召によつて歌御會始を行はせられ、御歌所を設置あそばされて、勅撰集に代る、新しい形式を以て此の道の興隆を企圖せられたのであつたが、その意義においては、遙かに勅撰集の意義にも連なるものがあつたのである。さうして、明治以後にお

ける和歌の隆盛をはじめ、多くの種類の文學の勃興を見、今日の盛大をいたす事が出来たのは、ひとへに天皇の和歌を好愛し給ふ御心に淵源してゐる事を忘れてはならない。政治上に、上代的な新しい日本の再現を以て、積極的な發展を見た此の時代には、文學の方面においても、同じく古代の文學的意義を新しく生かす道が辿られなければならなかつた。

天皇は御自らも勅撰集を撰び給うてゐる。拾遺集は、藤原公任の撰といふ説もあるが、むしろ花山法皇の御撰であると考へられ、公任は、これと似た拾遺抄の方を撰んだものと思はれる所がある。風雅集に至つては、花園法皇の御撰にかかり且清新にして印象的なすぐれた作品を多く收めさせ給うた點において、玉葉集と並び、新古今集以後の双璧と云はれる。これらの勅撰集も亦、大いなる和歌への刺戟となつて、當代及び後代の文學を興隆せしめる契機ともなり、それ自體においても、すぐれた御業績たり得たのである。

後白河法皇御撰の梁塵秘抄は、民間に流行した君謠を輯めさせ給うた書で、當時

の民衆生活が、これらの歌謡を通して、赤裸々に現されてゐる。至尊の御身を以てかういふ民間のもてあそぶ歌謡にまで御注意を拂はせられ、國民とともに喜び給ふ歡應はまことに畏き極みである。しかも、文學の歴史の上でも、一般の國民の精神的社會的生活の實相を如實に歌ひ籠めた貴い遺産が、これによつて傳へられ、知る事を得、しかも湮滅しやすい此の種のもの、の性質として、散亂、亡失の危険が多かつたにもかゝらず、此の御撰によつて、長く残される事が出来たのは、一層貴い御業績として國民たる者は仰がなくてはならないのである。

三

以上において、最も重要な點に觸れたのであるが、なほわが民族文學に流れてゐる精神に傳統するものは、更に幾多の性格を含む。

その一は自然美に對する憧憬であつて、自然の風光の美と、靜的・動的な變化、推移の興趣とは、つとにわが國民の發見した所である。かくて、あらゆる藝術は、此の自

然美を中心として展開せられる。國民の精神生活も亦、此所から昂揚せられて來るのである。

自然美に對する情趣は又移して人事の間の人間的感情が動かされる場合について見ても同じなのであつて、たゞわが國の文學においては、それが一種の悲哀の諦念において、裏づけられる場合が少くない。かくて一種の隱逸的思想が生じて來る。人間に失望して自然を友とする境涯に入る場合、それは、國家や社會より隔離して、ひとり清澄の生活を楽しむといふ精神が生かされ、これが文學に働いて來る。それは、消極的性質を持つものであるが、又一方においては、その何ものにもひしがれず、撓められない剛毅の精神が、此の結果養はれて、鍛練苦行の道が開かれ、一人の精神以て萬民を救はんといふ悲願にも到達する。そこに到れば、既に宗教的性質を帯びて來るが、なほ藝術的心境において、此の精神のつなされる場合が認められるのである。芭蕉の抱く俳諧精神の如きは、やはり、此の系統に屬して、積極的性質を帯び來つた文學精神であると解される。これは、わが民族文學の持つ特質

のその二である。

憧憬の情緒は、あはれと感じる精神で、これを感情に即して云へば所謂物のあはれともなり、又表現せられた作品そのものに即して云へば、幽玄の精神にも展開する。幽玄とは、餘情を残した作品そのものの藝術境について云はれる精神であつて、物あはれが、作者自身の心境に關する事多きとは、稍性質の異なるものである。従つて、文學的意義においては、此の幽玄の方に程度の高い、又進歩したのを見る事が出来る。

憧憬の情は浪漫的な神秘感を起させる場合が多い。此の神秘的な藝術境は、又わが民族文學の特色の第三たるものとしてあげる事が出来るのである。

此の他にもなほ幾多の點があげられ、それについては、以下の各章の中においても説く所があらうとする。併し、何ものにもまして、至誠の情は、常にわが文學の根本精神であり、他の諸多の性質は、此の根本精神に脈絡をもつて派生せられて行つたものである。従つて、すぐれた作品と作家との精神を考へる時、その心の底には

必ずまごゝろより出でたもののある事を發見する。此の基底となる土臺石の上に建てられた種々の形の建築が、それぞれの特色を持ち相違の姿をとるのに過ぎないのである。此の基礎は固くして深く、上古より現代に至るまで崩れず荒されない。これこそは民族文學を構成する根柢である。此の本質から出でて、民族文學が、國家愛を發揮し、人間的情緒が、個人的心境が、國家的精神の中に融合し、國民精神の總和として、國家全體の組織の中に浸透する時は、じめてその眞實の意義を持つに至るのである。同時に、それは煽情でも卑陋でもあつてはならない。崇高なる精神が、絶對的藝術境によつて生かされるべきである。それは享受者の教養と感動の深淺によつて商量せられる。民族文學の價値は此の方面からも定まるのである。

私は、民族文學の本質と意義とを、かやうに思ひ定め、その批評の基準を、かやうな意味において樹立しようとし、此所から取扱ひをはじめようと試みてゐるのである。此の方法がいかなる結果に到達するであらうか。

一、天皇の御文學

民族文學の歴史はまづ、天皇の御文學によつて始められなければならない。それは、民族の歴史の構成が最高至尊の御位を中心とし奉り、萬世一系の皇統が不易の歴史的傳統にまします如く、民族文學も亦、その御文學に至上の文學的意義と最高の歴史的傳統とを見出すからである。われわれは此所に歴代の御製を拜誦する。

聖武天皇御製

ますらをの行くとふ道ぞおほろかに思ひて行くなますらをのとも

此の御製は、節度使に賜うた御歌で、節度使は各道に派遣せられて行政を見そなはしめられ、特に軍事上の要職として、必要に應じて征討の任に當らしめ給うたものである。それ故、ますらをのともと云はれて、その任務の重大なるをさとし給うてゐるが、此の御製を拜誦する現代の人々も亦、天皇の御心を脈々として身に體

する痛切なる感じに打たれるであらう。年月の隔たりを去つて、御製の生命は現代にまで生きて傳へられてゐるのである。

桓武天皇御製

此の酒はおほにはあらず平かに歸り來ませと祝ひたる酒

此の御製は遣唐使に賜うた御歌で、任務を無事に果して歸着するを祝し給ふ御心は、まことに畏多い。現代でも外國に遣はされる使臣のごときは、この御製を拜誦して、うちに願ふ所がなければならぬ。

孝明天皇御製

ほことりて守れ宮人九重のみはしの櫻風そよぐなり

以前の御製と異なり、急迫した幕末の情勢に照らして、此の御製の命じ給ふ所は一層力強く雄々しく、臣下の心に響くのである。

これらの御製において、天皇が臣下を激勵し給ひ、又信頼し給ふ事の深さをうかゞひ奉る事が出來て、貴い極みと申さなければならぬ。まことに 天皇の御

負荷の思召に背かざるの念を臣民たるもの皆一同に起して來るのであつて、御恩命の厚きに感奮する國民の精神的振興は、實に 天皇の御文學の持つ重大なる御意義の一つである。それは威嚴と權威とを以て特色づけ奉る事が出来る。

後嵯峨天皇御製

敷島ややまと島根の朝霞もろこしまでも春は立つらし

日本の霞が支那までも覆ふ世界の春を詠じ給うた雄大なる御製で、まことに萬國に聳立するわが日本の國威は、天皇の御稜威に發祥して輝かしめられたものである事が痛感せられるのである。

龜山天皇御製

四方の海浪をさまりてのどかなるわが日の本に春は來にけり

此の御製も亦悠容として迫らざる御心が拜せられ、元冠の役に處し給うた 天皇の御製として、拜誦するものには一層深い感動を與へ給ふのである。

後土御門天皇御製

なびくなり四方の夷の心までやはらぐ國の風をうつして
やはらぐ國はわが日本の事である。四方の夷國までわが日本の風俗を取り入
れて、わが國風に靡くと仰せられるのである。何といふ力強い御信念であらう。

後土御門天皇御製

動きなく治め來にけり、この時を人の國にも仰がざらめや

異國においても、わが國の動きなき進展には尊崇の念を寄せざるを得ないのである。

これらの御製は、いかにも雄渾壯重にして、世界を掌中にとつて見そなはしめ給ふかの感があり、天皇の此の御心あつて、始めて日本の偉大なる發展が約束せられてゐる事を固く信じしめられるのである。此の雄大壯嚴にして、臣下の心に厚く信賴安心の念を起さしめ給ふもの、これ又天皇の御文學の御意義の一つである。

後鳥羽天皇御製

われこそは新島守よ沖の海の荒き波風心して吹け

後鳥羽天皇が承久の亂の結果、北條氏によつて隱岐の島に遷幸し給ひ、此所で詠じ給うた遠鳥御百首は、一首一首悲痛なる御心を宿され、卒然として拜誦するに堪へない畏多い御製ばかりである。その中でも、此の御製は特に人口に膾炙してゐる御作であるが、これらによつて、北條氏の越權逆謀を深く憤り、此の國本にもとる亂を再び繰り返さざる念を、國民に起さしめ給ふのである。後鳥羽天皇の英邁なる御淑慮を拜察し、新古今集の編纂に際してもうかがひ奉る事の出来る、文化を好愛し給うた御心、音楽、文學を好ませ給ひ、種々の技能に秀でさせ給うて、藝術を振興せしめ給はうとせられた豪華絢爛たる御半生、就中親政の理想を實現しようとはからせ給ひ、狩獵武技にも御心を傾けさせられた勇壯英武なる御性格を考へ奉る時、御一生を遂に隱岐に終らせ給うた御憾のほど、思ひ奉るだに、恐懼に堪へない。

かういふ意味の御製は、崇徳天皇、土御門天皇、順徳天皇、後醍醐天皇、後村上天皇にも拜誦する事が出来るのであつて、御製の御意義を、かゝる點にも認め奉るのはまことに畏多い事であるが、國家治亂の範を御身を以て示し給ひ、國家興

隆の意義を後鑑に垂れさせ給ふ御心あるものとすれば、これまた御製を俟つて國民の強烈なる感情も動かされ實行の方途を考へるに至るものである。哀切悲痛の御體驗、御情緒は、天皇の御文學におけるほど、最も高く貴く發せられることはない。しかもこれは詩歌において最も根本的な要素となる精神なのである。

後水尾天皇御製

死なばやなもよほし草上世の中の目にも耳にもあまる事こそ

徳川幕府に對し、御心を動かされ給ふ種となれば、むしろ死なばやと仰せられ、激しい御怒の情を極めて率直に詠み出し給うてゐる。朝廷に對する武家の驕慢無禮は、拜誦するものをして心を振ひ立たしめるものがある。此の御製も亦、後鳥羽天皇の御製と同様の意味で、此所に記し奉るのである。次には又異なる意義を持たしめられる御製。

後醍醐天皇御製

民のため時ある雨を祈るとも知らでや田子の早苗とるらむ

農民にまで御心を配らせ給ひ、上にましまして五風十雨の順調なる運行によつて豊年を祈念し給ふ御思遣りのほど、まことに貴い御製である。

靈元天皇御製

遙かなる田の面を見てもいとまなき民のしわざの程をしぞ思ふ

田を見そなはしては、農民の業の忙しく勞苦にいたづくさまを思ひやらせ給うてゐる。農民は、わが國の一般職業の根本であつて、大御寶と云ひ、農民を思ひやらせ給ふのは、すべての國民に御惠の情を垂れ給ふのと同じである。

櫻町天皇御製

あはれなりさも苦しげにはるばると薪負ひつれて歸る山びと

木こりの苦しい生活に、あはれなりと御同情の御言葉を發してをられる聖慮を仰ぎ奉るべきである。

後土御門天皇御製

うれへなき民の心ときくからに今ぞわが身の樂しみとせむ

かくて、平和なる國民の生活こそ、天皇の御喜び、御楽しみである。と仰せられる。これらの御製を拜誦しては、叡慮の畏さに一層の勤勉努力を誓ひ、國家の平和安泰を祈願して、叡慮を安んじ奉るやうに奉公の念を振ひ起さないものはないであらう。かくて民心におのづからに起る感謝、感激の念は、國家に對する一層の貢獻となつて現れるべきである。此所に、天皇の御文學の慈愛に富み給ふ御意義の二つがある。

後柏原天皇御製

波の上野山の末に思ふなよ道とは人の心なりけり

道は自然にあるのみにあらず、人間の心に存すると教へ給ふ御製である。従つて、道をたゞし心をひきしめて行くべき事をさとし給うてゐるのである。

孝明天皇御製

池の面に照る月影の曇らぬは人の心の鏡なりけり

月影の曇らぬを手本として人の心も清く澄めよと誠め給うてゐる。

これらの御製は端的に道德を教へ給ひ、人間の踏み行く道を示し給うてゐるのである。臣下の間に種々見られるその種類の歌は、所謂道歌であつて藝術的な詩情に乏しく、従つて感動を人に興へる所も少くて、たゞ道德的概念だけを和歌の形で人に傳へようとしてゐるにとゞまるものが多い。然るに、御製においては、國民に對する、天皇の御誠として、詔勅と同様の意義を以て、國家の大道を一般國民に示し給ふ所に、その重要な意義があるのである。殊に、御製においては、實賤窮行の道として、これを示し給ふのであつて、

後柏原天皇御製

さまさまの道の一つの境をもふみみぬ身こそまづ苦しけれ

と御自ら仰せ給うてゐる如く、御心を勞して、道義の實踐を行はせ給はうとあそばされ、かくその困難なるを體驗させられては痛嘆の情を發せしめ給ふところ、國民のこれを拜誦するものは皆、天皇のさとさせ給ふ軌範に追隨し奉らうといふ心の湧然と湧き起るを感じて、思はず襟を正すであらう。實に御製の持つ御意義の

一つには、此の道義的倫理的性質が重要な面を占めるのである。しかも、それは空虚なる異國の倫理道德と異なり、御自ら範を示し給ふとともに、わが國家と國民の血脈に躍如として生きて働く作用を施す性質を持たしめられてゐるのである。天皇の御文學の持つ御意義は最も重要で、且切實なるものがある。此所から、國家の文學は發展して行くのである。

更に、順德天皇や、後鳥羽天皇の如く、和歌といふ文學の御研究や御論議に、前人の何人もが到達し得なかつた精到なる結果を示し給うた至尊もあらせられる。順德天皇の八雲御抄、後鳥羽天皇の御口傳は、わが歌學上の名著として甚大の價値を有する。これらの御著はひとり和歌の上のみならず、幾多の影響を文學界に與へ給うた。例へば芭蕉の俳諧上の意見には、後鳥羽院御口傳を引用し奉り、その御意見から種々の思考示唆を得た所がある事を示してゐるのである。

漢詩の歴史は、弘文天皇に流を開く。さうして、天皇の御製には、
皇明光日月

帝德載天地

三才並泰昌

萬國表臣義

の如き雄大なる御作を拜する。此所に淵源して、漢詩も亦、思想的内容により、國家的思想と結びつく機會が多く、一種の志士の文學ともなつて來たのである。

かくて、天皇の御文學の御意義と本質とは、民族文學の中樞たり、國民文學の腦髓たるのみならず、實に國家的精神と生活の根本たり、基準たる所にあるのである。歴聖の御製又此の御意義をよく發揮し給ひ、その本質に叶はせられてゐる。國民は、天皇の御文學の眞實の御意義を味ふことにより、その生活の精神的、又社會的機能を純正ならしめなければならぬのである。

二、明治天皇の御文學

歴代ともに、文學的御業績を示し給うてゐるが、それは和歌を主として、漢詩、物語

より學術的御研究にまで及ばせられてゐる。特に御製にすぐれさせ給ひ、和歌を好愛し給うた。天皇には、後鳥羽天皇、花園天皇、後柏原天皇、後水尾天皇、櫻町天皇をはじめ奉り、多く御集を残させ給うてゐるのであつて、それによつて御風懷を拜誦する事が出来るのである。

殊に、後鳥羽天皇のごとく、波瀾に富み給ふ悲劇的御生涯と英邁なる御資質とから流れ出でた、御心緒の響には、惻々たる哀音が籠り、しかも一方、清澄典雅の風趣を傳へさせ給うて、和歌の道に、簡朴なる誠實と質實なる人情の上に、瑰麗なる技巧と靈犀なる感覺とを加へ給ひ、素朴と微妙、豪宕と繊細、放膽と鋭敏、簡明と複雑、自然と官覺の入りまじる、至醇の妙處を發揮せさせ給うた。その御作品と、後鳥羽院御口傳に拜する御歌論とは、顯著なる影響を傳へて、萬葉古今にならぶ名歌集なる新古今集の編纂を見そなはせ給うた事や、空前絶後とも申すべき最大の歌合の行事である千五百番歌合を催させ給うた事などの御業績とともに、わが文藝の歴史の上に巨歩を印し給うた。

最近代に至つて、明治天皇のまします事は、更に、わが文學の上における一大光榮であり、文學の歴史の最も強い誇である。天皇の御統治のもとに明治史の輝かしい進展が齎らした赫々たる大業については、今改めて申すまでもないが、此のあらゆる分野に示された御稜威は、又、文化的方面においても、特に當面の文學についても、歴史の上に稀有なる發達を見せて、照被し給うたのである。詩に小説に戯曲に、かつて見ざる高く深い藝術境に到達し得た事は、一般文化の進歩に伴ふ、作家の努力勵精と相俟つて、その位置の確立、資質教養の高上などによるものであるが、これらのすべてについて、天皇の御惠澤をしのび、御恩徳を仰がなくてはならない。

明治天皇の御文學は、和歌に對して特に勵精し給ひ、比倫を絶した量と質とを以つて詠み出でさせ給うた多數の御作品の中に求め奉る事が出来るとともに、御歌所を設置し給ひ、歌御會始、その他の折々の行事を行はしめ給うて、此の道を獎勵し給うた事、又、種々の藝術を天覽あそばされ、一方において勸奨の思召を拜する機會の種々あつた事などによつても、文學に御心を寄せさせ給うた聖慮のほどを拜察

申上げる事が出来るのである。

天皇の御文學の御意義については既に申し述べて来た如く、特に重要なものとして權威、壯重、痛切、仁慈、道義の諸點を掲げたのであるが、明治天皇の御文學においては、これらの御意義を、大方すべて含み給うて、國民に示し給ふ所が、一層廣く切實で且甚だ力強いのである。

世を治め人をめぐまば天地のともに久しくあるべかりけり

明治二年英國皇太子に賜へる此の御製の迫力に満ちた權威を拜せよ。英國も亦御教に従つて覺るべきである。

よもの海みなはらからと思ふよになど波風の立ち騒ぐらむ

日露戰役中の御製。八紘一字の御精神を世界にのべ給へる此の威嚴に、萬國皆摺伏すべきである。

はれ渡る空にむかひて思ふかな新高山の月はいかにと

あたの船うちしりぞけていくさ人大海原の月や見るらむ

新領土の月をしのび給ひ、敵を敗退せしめた後の海戰の洋上の月を思ひ給うた

雄大壯重の御趣を拜承すべきである。

明治天皇の御製には悲痛な趣に拜せられる御歌はない。悠容たる御資性と、國家的發展の希望に満ちた時代を統治し給うた御事とによるのである。

山田もるしづを思へばかばかりの秋の夜寒を何かいとはむ

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

國のためあだなす仇はくたくともいつくしむべき事な忘れそ

御慈愛の御心は、一般民衆に及び、特に名譽ある戰死者の上に及び、更に敵國にまで及んでゐるのである。拜誦しては、ただただ感涙の下るを覺えるのみ。

道義を教諭し給ふ御製に至つては、國民の心にしみ通るもの多く、

ゆるされてまなびの窓をいづる子よ思はぬ道に踏みな迷ひそ

思ふこと思ふがまゝになれりとも身を慎しまむことな忘れそ

のごとく概念的な理窟ではなく、人情の力の眞をもつて暖かく諄々とさとし給う

てゐるのである。御製の御意義は、國民生活の基範として、此所に一層その御眞價の發揮せられるべき理由がある。

和歌とまごゝろの關係は、御製の中にも、

世の中にことある時はみな人もまことの歌をよみいでにけり

と宣はせられてゐるが、まことに文學を愛し給うた 明治天皇は、文學の本質をよく覺り給うて、かくさとし給うたのであり、維新志士の歌を見よ、天皇御自らその實行を示し給うたのであつた。御集の中、最も御製の數の多きは、明治三十七年の二百八十首と、三十八年の百九十七首である。しかも有難き大御心の拜せられて、此の戰役にいかに御心を勞し給うたか拜察するだに、畏多き御製が多いのであるが、これによつて、御詠歌を怠り給ふ事なく、却つてますます多數の、しかも貴き秀れた御製を詠み出で給うたのは、文學の道の範を垂れ給うたもので、文學の眞實の力は、かくして發揮せられなければならない。此の意味でも、天皇は實に歌聖であらせられた。

明治天皇の御製は、極めて平易に御心のまゝを詠み出でさせ給うて、いかなる國民の胸奥にもしみ入り、容易なる理解をもつて、心より感激申上げるのである。平明素朴な感動を傳へさせ給ふ所に、その御特色がある。さうして一氣に詠み下し給うて、一首に貫通する自然な表現法をとらせ給ふ所、上代的な格調を湛へさせられて、雄大壯重の御趣を示し給ふのである。此の悠容迫らざる御風格は、後鳥羽天皇の悲痛なる御生涯と對比申上げることが出来る。しかも潤達の御資性において、共通するものを持たせ給うたが、時代が全く異なつてゐたのである。かくて、後鳥羽天皇の暢達な中に、優艶纖細の御趣を湛へさせられた新古今時代の御歌風は、又、明治天皇の御製と好對照をなすと申上げる事の出来るものであるが、此所に一時代を劃し給ふ歌聖として、巨大なる御足跡をとゞめさせ給うた事は同一であらせられた。上に此の歌聖ましましてこそ、文化の發達も期して俟たれたのは當然であつた。

いかなる文學の歴史も、その動力の根源を辿り辿つて、深く高くさかのぼる時

天皇の御文學に到達するのである。文化を輝す電光を發するその水力の源は、山河を越えた、遠いか、なたの雲深き所、そこに流れてゐる豪宕の響、清麗の色を持つ一筋の常に絶えせぬ水の流であつた。われわれは滔々として千古の昔より今に至つてなほ濃く色をます大河を仰ぐ時に、民族文學の歴史の意義が正しく認められ、深く強く印象づけられる事を知る。

かくて、天皇の御文學は民族文學の本源であり、心臓であり、正宗である。此所から發して國民の文學に及ぶのである。

三、日本武尊

古代の素朴にして無邪氣な精神生活は、古事記、日本書紀の中に赤裸々に寫し出されてゐる。これによつて、われわれの祖先の姿を知り、顧みて、われわれの本然の精神生活の在り方をも考へる事が出来るのである。

此の上古の生活は、常に純粹な詩精神で覆はれ、豊かな情熱を撒布し、古典的な整

齊を以つて装はれてゐる。そこに、われわれの魂の故郷を見出す幾多の美しい營爲がある。

多くの古代の詩人の中でも、特に日本武尊こそは、その高く清き御精神を以つて、代表的な位置を占め給ふ。そこにはすべての古代人のさまざまな生活體驗を含めさせられ、そこから一個の理想的典型的塑像を作り上げる事が出来る。日本武尊こそはまさしく、國民的英雄であらせられ、民族的人物でおはした。

日本武尊の短い御生涯は、勇武と愛情とを以つて貫かれ、悲劇的な輝きを以つて閉じられた。東奔西走して、梟賊の平定に當られ、常に身を以つて事を處せられたのである。それは敵將をして讚嘆の情を惜しまざらしめたほどで、熊襲梟は誅戮せられる際、その御名を稱して倭建の御子と申し上げた。相模國では兇徒が野火をつけて焼かうとしたのであるが、迎へ火をつけて巧みに勝を征し給うた。此の膽勇と智略とは、またすぐれた日本國民の資質であるが、同時に尊は、西に熊襲建を討伐せられる際にも、東に蝦夷を征せられる際にも、伊勢の皇大神宮に仕へてをら



れる御姨君倭比賣を訪ねて、そこから危難に處する方法を得て來られる事をお忘れにならなかつた。これは、皇大神宮に參拜する事によつて、重大な任務に善處するわが國民の態度を示し給ふものである。

渡海の途中後の弟橋比賣が海に投じ給ひ、後尊が此の後の御事をしのばれて、吾妻はやと仰せられた御嘆きこそは、すべての人間の胸に應へる共通の嘆きである。此の嘆きを訴へられたがゆゑに、尊の生命は現代人の心にも脈々としてよみがへつて來るのである。

さうして、弟橋比賣が入水せられる時、

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも

と歌ひ給うた御歌こそは、日本婦人の犠牲的精神と男性に對する最高の愛情を示された、無限に美しい絶唱である。此の一首には、すべての日本婦人の美德が歌ひ籠められて、痛切な詩精神によつて生かされてゐる。

後の夫君に殉ぜられた御態度が、日本婦人の覺悟を示されるものであるなら、日

本武尊の熱病を犯しての御東征の結果、途中に薨ぜられた御一生は、國家に殉ずる國民の決意の軌範を示されたものと申すべきであらう。その薨去に當つて詠み出で給うた最後の御歌こそは、懷郷の情を述べられて、大和の自然の美しさをしるばせ給うた、心の明く淨く直き上代人の精神生活の結晶であるとともにまた、永久に日本國民の心情である望郷の嘆きを、此所に訴へさせられてゐるのである。

大和は、國の眞秀處、たゞなつく、青垣山、籠れる大和し麗はし

綠翠を湛へた連山の重疊たるに圍まれてゐる大和の美しさ、それは、山高く水清きすべての日本の姿でもある。

命の眞幸けむ人は、疊ごも平群の山の熊樞が葉を鬢鬢にさせ、その子

故郷の草木に無限の愛情を寄せられてゐる。さうして、生命の幸福を讃へて、盡きぬ悲しみの中にも、残る者の前途を祝福し給ふ豊かな情味が、此の一首の中に、哀愁と歡喜とを交錯せしめてゐる。此の人間の御精神も亦、國民のすべてにわたる暖かく美しい心である。

愛しけやし、我家の方よ、雲も立ち來も

さうして最後に、大空の雲に叫びかけて、そこに故郷の姿を認めつゝ、尊は御息を絶たれるのである。

尊の御生涯が悲劇的であらせられたのみでなく、その御歌を通して、自然美、人間愛、それから國家的精神を發揮せられ、わが文學の歴史に貫通する大きい特色を、此所に盡くされてゐるのである。云ふまでもなく、大和に對する熱愛は、同時に國家に對する熱愛でもなければならなかつた。尊の御歌には、ほのかなる郷愁にもまさる強い感動があつた。そこには國民の精神生活の正しい形相をうかゞふ事が出来る。民族文學は、此の崇高なる精神が送り出る所から始まるのである。

四、柿本人麿

純粹の日本の文學精神は、上代文學においてこれを見るべきである。上代の文學精神は、その精粹を、萬葉集において探る事が出来る。さうして、萬葉集の精神は

柿本人麿に凝縮せられてゐるのである。

出自も分らず、生年歿年ともに不明な柿本人麿こそは、永久にその光輝を失ふ事のない民族文學の詩宗である。

人麿の精神は、天皇に對しまつる絶対の信仰と讚仰の念に、これを認める事が出来る。持統天皇が雷丘に出遊あそばされた時

大君は神にしませば天雲のいかづちの上に慮せるかも
と謹詠してゐるが如き、その精神の端的な現れである。

人麿は、天皇の行幸に侍して、臣民心を一にし、自然の神々も、ともに仕へまつる、わが國家の幸福を喜びたいへては、山川も依りて仕うる神の御代かもと歌つてゐる。

かういふ國家的な幸福の歡喜を歌ふとともに、又一方人麿は、民族の運命を見つめては、深い歎き悲しみに心からの詠歎をもち、悲哀の歌人でもあつた。人麿の作品には、死を悲しむ歌が甚だ多い。又、近江の舊都を過ぎて、その荒廢の跡を見る

時百敷の大宮所見れば悲しもとも歌つてゐる。

併し、この悲しみは、運命の永遠を信ずる事によつて、やがて限りなき喜びに導かれるのである。高市皇子の薨去を悼み奉る人麿は、綿々たる悲しみの情を叙して來て、最後に、

然れどもわが大君の萬代と思ほし召して、作らしし香具山の宮萬代に過ぎむと思へや、天のごと振仰け見つゝ玉樽懸けて偲ばむ畏かれどもといふ、永遠の生命に對する歡喜の情を以て、歌ひ終へてゐるのである。

最も深い悲しみを知るもののみが、又最も大きい喜びを味はふ事が出来る。實に、人麿は、さういふ人間としての、最も高い情感を體驗した、偉大な歌人であつた。

併し、人麿が民族としての高く強い意志に觸れる爲めには、さういふ個人的な情感を歌ふだけでは不十分である。人麿の歌のすぐれたものは多く、皇室宮廷に關して歌ひ出された作品である。死を歌ふにしても、日並皇子や高市皇子の如き、上代の歴史に光輝を加へられた皇子の方々を詠み奉つてゐる。

しかも亦一方では、吉備津安女の死に對して、その夫や遺子の悲歎に同情し、讚岐狹峯島の海岸に横たはる旅人の死體を見ては、郷國に残された家人の上と思ひ及んでゐる。人麿の歌には、此の他にも寂しく旅先で死んだ人々を悲しむ歌がある。それは、人麿にとつては、それらの名も知れぬ人々までが、同じ民族の愛につながられてゐる爲めに、その博大な情感と精神が動かされたのである。かうした意味で、人麿は、日本國民のすべての人々の悲しみを、一つに集めて具現したのであるといふ事も出来る。

又、人麿の歌には、肇國の歴史を以て歌を起し、或は、さういふ歴史の一場面たる勇戦の狀を描いて、渡會の齋宮ゆ、神風にい吹きまどはしと、伊勢皇大神宮の神風の奇蹟を讚へまつた作もある。さうした國家の歴史の觀念が、人麿の歌に意識せられてゐた事は、やはり、その作品を以て、民族文學たらしめる理由の一となる。

人麿の作品には、祝詞の影響を受ける所が著しい。祝詞は、わが原始文學の淵源たるもので、その美しい表現と崇高な思想とは、力強く民族の共感に訴へる。人麿

が此の祝詞より得來つた所が多いのは、人麿の作品がやがて祝詞的な民族文學の色彩を濃厚に帯びる所以であるとともに、又祝詞の素朴且渾沌たるを、藝術的な彫琢によつて、一層雄渾な作品へと精練せられたものである。人麿の作品の、かくの如き本質の故に、人麿こそは民族文學の上代を代表する國民詩人たるのである。

五、山上憶良

柿本人麿は、その全圓的な人格の完成において、民族文學の最高峰に聳立するものであつた。その人麿の人格を二つに分つて、此所に、人麿に次ぐ二人の代表的な歌人を得る。山上憶良と山部赤人とがその人々である。かつて、山柿とて、柿本人麿に山の姓を持つ人が並稱せられたが、その山の姓を持つ人は、山部赤人か、然らずんば山上憶良である。むしろ、此の二人が合一して、はじめて、一個の人麿に匹敵する人とならう。然らば、山柿の山は、此の二人に分けるよりも、そのいづれをも意味するものと見てもよい。

憶良が人生詩人であるとするれば、赤人は自然詩人であり、憶良が人間的であるとするれば、赤人はより多く自然物に親しんでゐた。しかして、その人間と自然との兩者を、一個の人格のもとに合せたものが即ち人麿の文學であつた。

憶良は、人間の悩みを赤裸々に告白してゐる。その悩みは、或は俗人的なものであるかも知れない。併し、さういふ悩みから超脱する事が出來ず、凡人的な苦惱をつきつめて訴へる所に、憶良の人間としての善良さがあり、現代のわれわれにも脈脈として響く人間性の深さが見られるのである。

憶良の訴へた悩みは、若人がいつか年老い、生の苦しみを痛感する歎きや、長い田舎の生活に、都の手ぶりを忘れて、ひとり取残されたやうに覺える寂寥の感や、寒夜わづかに酒の糟湯と、麻蒲團に暖をとつて、更に一層の貧民の上に思ひ及ぶ生活苦や、老年に及んで、恐らくリユーマチであつたらしい病苦に苛まれる苦痛や、更に妻の死にあつて愛憐の情に堪へず、悲歎の叫びをあげるに至るまで、およそ凡人的な苦惱であるが、しかもそのいづれもが、眞實の惱める者の苦惱に徹した聲である。

憶良の悟り切れない浅ましさを嘖り笑ふ事が出来る者は幸福である。しかも憶良と同じ歎きに悩む者が今の世にもいかに多い事であらう。

憶良のかうした悩みは自然宗教を求め、哲學に走るに至らしめる。かつて憶良は唐に留學して、外國の知識を學んだ。彼が佛教や儒教に通じ、大陸の宗教や思想に深い造詣があつたのは、此の故である。しかもそれによつて彼はいかなる解決に到達したのであらうか。結局憶良が最後に歸つて來たものは、皇神の嚴しき國、言靈の幸はふ國と神代より語りつき、云ひ傳へて來た日本の國自身の精神であり、大和民族であり、國民思想そのものであつた。それが最後の到達點であつたのである。かくて憶良の人間の悩みが、民族文學としての意義を持ち、民族意志にながりを持つ事となるのである。

憶良の惑へる情を反さしめる歌は、老壯の虚無思想にかぶれた多くの青年達が、清談清遊と稱して、家庭を外に出歩き、國家を超越しようとする傾向のあるのに對し、天へ行かば汝がまに、地ならば大君いますと喝破して、國民としての責務が、

さういふ自由をほしいままならしめず、外來思想に惑はされる事なくして、暖かき家庭に歸るべき事を歌ひ上げてゐるのである。

まことに家庭こそは、憶良の最後の慰安所であつた。家族主義が、俗人的な悩みに苦しんだ憶良の最後に到達した解決であつた。憶良の苦惱は、此の大和民族の家族主義によつて救はれたのである。少くともその悩みを忘れる事が出來たのである。瓜をたべても栗をたべても、先づ愛子の事を思ひ出す憶良であつた。宴會の席上で、人々が夜の更け行くも知らず酔ひ痴れてゐる時、家に夫の歸りを待つ妻や子を思つて、早く暇を告げて歸らうとする憶良であつた。「父母を見れば尊し、妻子見れば慈ぐし、愛くし、世の中はかくぞことわり」と歌ひ、

銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも

といふのが、憶良の心からの叫びであつた。かつて、唐にあつて日本を思ひ、

いざ子ども早く日本へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ

と歌つた憶良は、外國にあつて、日本の尊さ美しさを心から覺つたのであるが、外國

との交通の不便であつた當時として、無事に故國に歸る事が出来たのは、三笠の山に出でし月をしのびつゝ、異郷に寂しく死んだ阿部仲麿よりも幸福であつたと云はなければならぬ。併し異郷に日本人としての名聲をあげた仲麿も、日本人たるの意義があれば、故國に歸つて、その豊かな外國文化の教養のもとに、外來思想に惑はされる人々と闘つた憶良も亦、生きがひのある一生であつた。

その最後の病床にある時、見舞の客に對し

男子やも空しかるべき萬代に語り續ぐべき名は立てずして

といふ悲痛の氣概に富む歌を口ずさみ、遂に憶良は此の世を去つたのである。

彼は最後まで、人間としての惱みを持ち續けて、安易な救に住さなかつたのであるが、しかも、彼の人間的な願望が、いかに日本民族の意志につながる事が深いかは、此の高く清き最後の一首が示して餘りがある。

六、山部 赤人

山部赤人は自然に親しんだ歌人である。日本の自然美を發見した人として、赤人を最初にあげる事は必ずしも當らないであらうが、併し、日本の自然を心ゆくまで聲高く歌ひ、思ふまゝに讚美したものは、彼を以て最初としてもよい。日本の自然美は、赤人によつて、廣く日本民族の胸奥に浸み込む詩想を得、又、眼にありありと映し出される畫想を得たのである。日本の自然の美しさを民族の間に識らしめたものとして、赤人の業績の大きさを見のがす事は出来ない。

わが日本の靈山富士山の雄大崇高なる姿を、清澄な表現によつて描き出したのも亦赤人を以て嚆矢とする。

天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き、駿河なる富士の高嶺を、天の原振り仰け見れば、渡る日の影も隠るひ、照る月の光も見えず、白雲もい行き憚り、時じくぞ雪は降りける、語り續ぎ云ひ續ぎ行かむ、富士の高嶺は

此の清朗にして雄渾な赤人の作にまさるものを未だ見ない。萬葉集には無名氏の作になる富士山の歌があつて、赤人の此の歌に比較せられるが、歌がらに稍品を缺く。到底赤人の此の作には及ばないのである。

赤人の残した足跡は廣い。東は東海道を経て、今の市川町である勝鹿の眞間娘子の墓を訪ひ、西は瀬戸内海をわたつて、伊豫の道後温泉に遊んでゐる。さうして、それらの土地で、胸に湧き起る詩情を歌に託したのである。

赤人の作は、自然を眺める眼の深く高く、さうして、心を暖め豊かにする自然への限りない愛情を以て、高い價値が與へられる。

ぬばたまの夜の更けぬれば久木生ふ清き河原に千鳥頻鳴く

あしびきの山谷越えて野づかさには今は鳴くらむ鶯の聲

の如く、彼は又、自然の美しい聲にも耳を傾けてゐるのである。

かういふ自然への没入は、時として、その歌に女性的な感觸を與へる。

春の野に葦採みにと來し我ぞ野を懐かしみ一夜寢にけり

の如き感情は、或は、まことに女性的といふ事が出来るかも知れない。もし憶良の烈しさを男性的として、赤人に對比せしめるなら、赤人の溫雅な趣は、確に女性的であらう。さうして、人麿に至つては、憶良の烈しさと、赤人の暖かさを併せ持つて、その上に憂苦に徹した慈悲の情をおのづからに具へてゐる大きさがあつた。人麿は、憶良の人間的苦悶の境を通つて、遂に彼岸に達してゐたのであり、自然の愛においても、赤人と同様に、これを見つめる事深く、しかも、野を懐かしみ一夜寢にけるほどの執着からは離れてゐるのであつた。

飼飯の海の庭よくあらし、菰の亂れ出づ見ゆ海人の釣船

といふ人麿の海の景觀と、

繩の浦や背向に見ゆる沖つ島漕ぎ回む舟は釣せすらしも

といふ赤人の海の眺望とを比較すれば、人麿の大きさと複雑さとおのづから知られるであらう。一口に云へば、人麿は女性的赤人と男性的憶良との上に立つ超人的存在なのである。

赤人は、たゞ自然に限りなき愛情を捧げるばかりではなく、そこに民族としての歴史を見た。光榮ある行幸のあとをしのんだ。伊豫の道後温泉では、此所に行幸し給うた、齊明天皇の御事を追憶し奉つて、遠き代に神さび行かむ行幸處と、日本の運命の永遠を聲高く歌つた。此の齊明天皇の行幸が、半島の叛亂を平定せられたる爲めの御親征であつた事を思へば、赤人の民族的感情の深い事が一層強く理解出来るであらう。或は又飛鳥の舊都の跡を訪れては、追懐の情を新にして、見るとに音のみし泣かゆ古へ思へばと、そぞろに涙垂れてゐる。此所に至ると、赤人の中に、人麿の姿の片影を窺ふ事すら出来るのである。

さうして、遂に赤人は、芳野や難波の宮の讚歌を作つて、此所に民族の心の象徴を認めたのである。吉野山、吉野川の悠久たる自然をかり來つて、その山のいや益々に、此の河の絶ゆる事なく、百敷の大宮人は常に通はんと歌ひ、更に、天地の遠きが如く、押照る難波の宮に、わが大君聞知らすらしと仰ぐ時、民族の最も尊い生命に觸れて來る。此所に至つて、赤人の文學は、民族文學としての崇高な形相を帯びるのである。

ある。

折から、畏くも、御生誕の内親王殿下の御名は、赤人が、芳野の離宮を讃め奉つた歌より選び給うたと拜承する。それは、河速彌湍之聲曾清寸神佐備而見者貴久と見える歌で、まことに赤人の光榮である事はいふまでもなく、吉野の離宮の讚歌が民族の限りなき發展の輝かしい行く手を照らし出してゐる所に、いよくその民族文學としての位置を確實ならしめるものがある事が認められるのである。

七、大伴家持

瓊々杵尊の御降臨の際、供奉申上げた方々の中に、二人の將軍と二人の神祇官とがあつた。二人の將軍は、天忍日命と天津久米命とであり、二人の神祇官は、天兒屋命と太玉命とであつた。此の二人の將軍の中、主なる方の、天忍日命の子孫が即ち大伴氏である。大伴氏はかういふ名譽ある血統を有する武人の家なのである。大伴家持の父旅人は、又、赤人や憶良と時代を同じうする有數の歌人であつた。

旅人は、太宰帥、即ち今日の朝鮮や臺灣の總督と同様の地位にあつた大官で、その下役として、山上憶良は筑前の國司を勤めてゐた。旅人は、都會人的な、又文化的な快活と幽愁、明朗と陰鬱の二つの半面を有してゐた、異色ある歌人である。繊細な感情の一面には、辛辣な皮肉をも藏してゐた。

此の人の子として、家持は生れたのである。大伴氏には歌人が多かつた。家持の叔母の大伴坂上郎女の如きも亦當代のすぐれた女流歌人であつた。さういふ家庭で、何不自由なき生活と豊なる環境のもとに、家持は生長したのである。その上美貌に恵まれてゐたと思はれる家持の青年時代は、多くの女性との交渉があつて、そこには平安時代の在原業平の面影をも認める事が出来る。

もし、さうした一箇の戀愛詩人として、家持の一生が終つたのであるならば、彼は民族文學の系譜の中に記入せられるほどの高い價値を與へられなかつたかも知れない。併し、家持は、いつまでも戀愛の陶醉の中に自己を忘れてゐるのではなかつた。彼が迷夢から醒めて己を取り戻した時、その腦中には忽然として、名譽ある家

系が浮んで來た。その胸中には、率然として、光輝ある武人の血がよみがへつて來た。むしろ、戀愛によつて彼の間味が磨かれ、熱い血潮が、異性の對象から、廣く國家的なものへと清め高められて行つたといふ事も出来る。

かつて越中守であつた時、若い下役人が浮れ女の愛に溺れて、故郷に残して來た妻の事をも忘れゐるのに心痛めて、彼は一首の歌を作り、教へ諭す所があつた。「大己貴少彦名の、神代より言ひ繼ぎけらく、父母を見れば尊く、妻子見れば愛しく、慈し」と人倫の大本を歌つて歴史を回顧する所より始まつてゐる。人々は、此の歌に、憶良の感へる情を反さしむる歌から流れて來るものを認めるであらう。さうして、此の歌に先立つ三日、詳しく云へば、天平感實元年五月十二日に、家持は、陸奥國より金を出せる詔書を賀きまつる歌を謹作して、聖武天皇の詔勅を拜讀した時の感激を籠めて、ひたすらなる喜びの情を聲高く歌つたのである。

その中で、彼は榮えゆく皇國の隆昌を祝して、自己の責務に思ひ及び、肅然として叫んでゐる、大伴の道の神祖の、その名をば大來目主と、負ひ持ちて仕へし官、海行か

ば水漬く屍山行かば草生す屍大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ」と言立て、丈夫の清きその名を古へよ今の現に流さへる祖の子どもぞさうして、人の子は祖の名絶たず大君に奉仕ろふものと、言ひ繼げる言の官ぞと、家訓を通じて自己の信念を披瀝したのである。此の一首の中に籠められた氣魄と誠意とは、民族の心を貫いて、永遠に流れるものである。されば、一族の中に、聊か家名を汚す者を出すに及んでは、族を諭す歌を詠んで、榮譽ある大伴氏の歴史を、ひさかたの天の戸開き、高千穂の嶽に天降りし皇祖の神の御代よりお仕へ申上げて來た尊くも永い血統に見ようとしたのである。さうして、此所でも

劍太刀いよよ研ぐべし古へゆ清けく負ひて來にしその名ぞ

と、武人としての凜然たる氣概を示してゐるのは、最早、青年時代の家持ではなく、争へぬ先祖の血の烙印を、そこに認める事が出来る。

邊陲の防備に出で立つ、東國の青年達を教導して、多くの防人の歌を集めたのも亦、家持であつた。防人の歌の、純眞素朴な聲を通じて、我々は、家持の青年指導の努

力に關する多くの隠れた功績を考へる事も出来る。

さうして最後に、家持は、遂に萬葉集を編纂する事によつて、萬古の後までも、上代人の魂の響を傳へたのである。家持の民族文學に残した不朽の足跡として、此所に、その巨大な記念像を永遠に聳へ立たせてゐるのである。

家持の歌に對する熱意は、かくて、その作品を通し、編集を通して、脈々と波打つ鼓動を、現代の我々にも、ぢかに傳へる。彼は又、山柿を師とすると言つて、人麿を、或は憶良や赤人を、近く高々と見上げてゐたのである。山柿は、家持によつて、巨大な姿を、我々に接近せしめた。民族詩を語るものは、家持に、衷心より感謝の意を表する事を忘れてはならない。

だが、家持の晩年は悲惨であつた。天孫降臨に扈從した四人の文武の大官の中、天兒屋命の子孫たる藤原氏が次第に頭角を現して、遂に他の氏族の、これに争ふものは、いづれも壓倒され驅逐されてしまつた。太玉命の子孫なる齋部氏が古語拾遺を撰んだのも、藤原氏に對立抗争するの意があつての事で、その氏族の歴史が藤

原氏に劣らざる事を明かにしようとしたのであつたが、これも遂に斥けられてしまつた。家持も、さうした騒ぎのさ中にあつて、しばしば蹉跌したが、不遇なる家持の死は、結局、大伴氏の衰亡を意味してゐた。さうして、藤原氏一人、平安時代の榮華を享受する事となつたのである。

八、菅原道眞

逆境は人間の眞實の價値を發揮する。悲境にあつて、人間の眞實の心が現れ、偽り飾らざる魂の聲が聞かれるのである。

もし菅原道眞が、順調なといふよりも、むしろ當時の一般の習慣に従へば、その家柄門地に比して、驚くべき異數の出世を見、畏くも、宇多天皇の御信任を蒙り、右大臣にまで昇り、又、關白の地位にさへも就く事が出来て、そのまま一生を終つたとしたならば、それは道眞に取つて、甚だ幸福であつた事はいふまでもないが、しかも後代のわれわれを今日の如く感激させる情においては、或は、聊か薄くなるものが

あつたかも知れないのである。

併し、道眞が、その榮進の時を殆ど頂きまで登りつくした時、そこには思ひ設けぬいや、それはむしろ人生行路において、さういふ異常の道を踏む者に取つては、しばしば經驗する事のある、意外な陥穽が作られてゐた。さうして、晩年は、暗澹たる流寓の中に、遙かなる謫居において一生を終へたのである。

憶良がかつて、鄙に五年住まひつゝ、都の手ぶりを忘れると歎いた、その筑紫の太宰府で、佗しく道眞は此の世を去つた。併し、それ故に、その筑紫における詩作は、道眞の一生の間に作られた數多の作品の中でも、最も哀切悲痛な眞情を傳へるものとして、不滅の光輝を放ち、永久に讀む者の心に強い感動を與へずにはおかないのである。

道眞は藤原氏以外の家にあつて、藤原氏と拮抗した。道眞の母は大伴氏であつた。大伴氏も亦藤原氏に對抗して、家持の如きも、その爲めに逆謀の汚名を蒙つた事が、一度ならずあつたのである。此の血筋を引く道眞が、遂に藤原氏の爲めに、犠

牲の壇に登された事は、却つて、道眞をして北野の神に祭らしめられるに至つた、光榮ある戦の賜物である。

道眞の時代は、日本における大いなる文化の轉換期であつた。上代文化は漸く末期となり、平安時代の新文化は未だ興らず、たゞ海外の文化を取つて以て、自國の文化を如何に處置すべきか、苦惱を重ねてゐた時代であつた。それは明治時代のある時期にも似るものがあつた。かくて和歌は衰へ、漢詩のみひとり行はれてゐたのが、當時の文學界の情況であつた。

さういふ時代において、道眞はもとより漢學の家として、漢詩文の作に長じてゐた事は云ふまでもないが、一方において、和歌の作にも大いに努めたのである。それ故道眞の作には、漢詩以外にも、和歌の作が多いが、たゞ残念な事には、それは詩集の如く一個の歌集として残される事がなかつた。

しかも道眞は、菅家萬葉集、一に新撰萬葉集といふの編纂をしてゐて、萬葉集以後、古今集編纂以前における、殆ど唯一の和歌の撰集としての貴重な記録をとゞめて

ゐる。さうして、その和歌には、又漢詩をも添へて、漢詩尊重の時代の風潮をも反映してゐるのであるが、道眞の歌道における功績は忘るべからざるものがある。

かやうに國風を重んじて、次第に和歌の興隆する機運を作つた道眞は、それまで累次派遣せられて來た遣唐使について、當時唐末の擾亂に際會してゐた支那には、最早學ぶべき何ももないと、その無意義な事を進言し、その結果遣唐使は永く廢止せられる事となつた。これは實に道眞の一大識見を示すものであるとともに、日本的な創造精神の偉大な發現でなければならぬ。此の道眞の作と假託せられる菅家遺誡に、「和魂漢才」なる語が用ひられてゐるのも、道眞の感化を見るべきで、これ實に、彼が民族文學の正統たる所以である。道眞の此の精神を離れて、彼の文學は存しない。

道眞は寂しく、謫地に住居したが、これは、天皇の御所置であるから、もとより誰をも恨む事なく、たゞ運命に忍従して、廢所の寂しい生活を續けたのである。さうして、人臣最高ともいふべき榮譽ある地位より、一朝にして、一家離散の悲惨な運命

に遭遇する事となつたが、たゞ、小さい男女の子だけは共に住む事が許されたので、これがせめての慰めであつた。それについては、道眞は非常に感謝の情を捧げてゐるのであつて、ある公卿の子女が零落して、博奕打門附となつてゐるのに比し、思量せよ、汝の彼における天感の甚だ寛恕なるを」とも歌つて、少男女を慰めてゐるのである。さうして、ひたすらに勅勘の強きを恐れ畏んで、「不出門」の詩を作り、競々として閉塞してゐた。九月十日には、前年の事を思ひ出して、「去年の今夜清涼に侍す、秋思の詩篇獨り腸を斷つ、恩賜の御衣今此に在り、捧げ持ちて毎日餘香を拜す」と吟じた。

此の詩に至つては、道眞の忠誠至心が、千古の後に通ずるものあるを見る。これらを通じて、われわれは道眞の中に、憶良の面影をも認める事が出来るが、憶良に苦惱の暗い影が濃いのに比すると、道眞には諦忍の情が強固で、そこに人生の救ひの道をも見出す事が出来る。それが即ち、國家と共に生きる方法で、道眞はまさしくそれを教へてゐる。

道眞の人格は、櫻よりも、むしろ清楚な梅に比すべきであらう。

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

は、まさに道眞その人の人格を詠み表はしたものである。至誠は遂に、民族文學の中流を貫通する核心である。

九、在原業平

わが日本の文學の歴史を構成する顯著な人々を見て来て、此所に始めて、一個の不羈奔放な人物に遭遇する。在原業平がそれである。

業平は、平城天皇の御子阿保親王の五男、御母は實に、恒武天皇の皇女伊登内親王である。さうして記録には、體貌閑麗、放縱拘らず、和歌を善くすと記されてゐる。此の二つの事は記憶せられておいてよい。業平の出自が、かくも尊いのに拘らず、彼はわづかに右馬頭、近衛中將、藏人頭の官職に至るにとどまつた。此所において、業平の行動については、種々の憶測が加へられて来る。彼が「放縱

拘はらなかつたのは、實に藤原氏の壓迫に對する一つの手段であつたのである、な
どとも考へられたりする。業平がその官職が低く、地方を流浪して歩いた事につ
いては、對藤原氏との關係も考へられるのである。併し藤原氏に反抗するものは、
大伴氏の如く、菅原氏の如く、非常な危機にさらされる。それらの人々の經て來た
道を眼前に見た業平の取つた方向は、既に牢固として抜く事の出來ない藤原氏の
根強い勢力の伸長に伴ひ、云はば、可成り卑屈と思はれる實際的態度であつた。彼
は晩年には、藤原氏の大臣の爲めに、頌壽の歌などを作つてゐて、明かに屈服、依附の
態度を示した。

それにも拘らず、業平が、そのすぐれた才能を以て、わが文學の歴史の上に、明瞭な
足跡を残してゐるのは、一にその歌を通して、わが國民に共通する歎き悲しみが、彼
の心の誠より、にじみ出てゐるからである。

業平は、長岡に居られた母伊登内親王の急病を報ずる

老いぬればさらぬ別れのありと云へばいよいよ見まくほしき君かな

の御歌に接して、取るものも取りあへず駈けつけて

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため

といふ歌を詠んだ。「さらぬ別れ」は死別の意である。人生に免れる事の出來ない
悲痛の事實を歌つて此の母子は、あらゆる人々に共通する苦惱を、此の兩首の和歌
で云ひ現した。親子の情愛の端的な表現が此所に見られる。此の歌が千年の後
の國民の愛誦に堪へるのは、わが國民において、その最も深いものを見得る、人情の
奥所から、これが出てゐるからである。

更に又、文徳天皇の第一皇子惟喬親王に對し奉る業平の感恩の情は、伊勢物語
の中の最も哀深い物語として、書き現されてゐる。常に御供をしては、楽しい日を
過してゐたのに、いつか親王は、比叡山の麓に、雪に閉ざされた御庵室で、寂しい生活
をあそばさなければならぬ御身の上となられた。それも、藤原氏に御身よりを
持たれなかつたが爲めで、まさに、業平の持つ慨歎と同じ御心持を、親王も味ひ給う
た事であらう。一日深い雪の中を、道も埋れた所に漸く辿りついて、いろいろお慰

め申上げ、夕暮に歸らうとして、

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは

と涙垂れつゝ歌つた作も亦、その眞情を以て、名歌の一たるべきものである。

併し、業平の作には、なほ眞率の情熱を感じる事が出来るとしても、既に上代的な力強さを失つて、平安時代的な弱さの影が、可成り濃厚となつてゐる事は否定出来ない。

ただ業平の功績は、沈滞の底に沈んでゐた歌道に新しい活力を興へて、その興隆の道を開いてやつた事である。業平は、渾身の情熱を籠めて、いかなる場合、あらゆる場所においても、ただ歌ひ歌つた。和歌が平安時代に復活を見たのは、業平のひたすらなる努力による所が少くないのである。それとともに、和歌が眞情の發露として人を動かす力の強かつたのも、業平あたりが、漸く最後にならうとしつつある。さうして、その後、歌は社交具化し、異性を誘惑する手段となり、下劣となつて行つた。

業平は六歌仙の魁首、その作には後世の人口に膾炙するもの多く、その意味でも、民族文學的な意味を持ちつつ、同じく六歌仙の中、唯一の女性なる小野小町とともに既に傳説中の人物と化してゐる。一般的に知られてゐるものについては、都鳥の歌をはじめ数多くあるが、今は一々について觸れるべき限りではない。

十、紀貫之

漢字から假名を創出した事は、日本人の文化創造の才能を示す有力なる實例である。一たん外國のものを容れながら、これを、いづれの國にも見られない独自の姿に全く變へてしまふ。これが日本的創造である。

假名は、かうして造り出されたのである。併し、いつの時代でも、日本の文字や日本の言葉よりも、外國のものを使ふ方が、多くの人の知らないものを知つてゐるといふ優越感に自己満足の情を味はふ者が多いのであつて、折角の假名の案出も案出といふのは適切ではない、自然に國民の間に生み出されたものであるが、多く顧

みられる所がなかつたのである。假名は知能の低い學問の浅い者が使ふ文字であつて、それは知識階級の使ふものではないといふやうな先入觀念があつて、相も變らず手紙でも日記でも漢文が用ひられてゐた。一般の男子の書く文章は、すべて漢字で書かれた。かうして、假名は女子の使ふものとせられてゐたのである。さういふ一般知識階級の謬つた考へに、敢然と反對の態度を示したのが紀貫之であつた。假名こそは日本人が造り出し、日本語に最も適した文字である。これは、わが國民の文字でなければならぬ。かくて、有識者の侮蔑してゐた假名文字を勇敢に取り上げた。

彼は古今集を編纂して、衰微してゐた歌道に新しく行く道を示したのであるが、その古今集の序文を、貫之は假名で書いた。元來、本の序文は、支那の書物の體裁をまねて、つける事となつたものであるから、當然漢文で書くべきものであつたが、貫之は、これを假名で以て記した。これは全く貫之の英斷といはなければならぬ。しかも、此の序文こそは、和歌の根本的な問題を組織的に論述した最初の文章とし

て、不滅の光輝を放つのである。日本人の獨創になる假名は、貫之によつて一般に使用せられる道を開かれたとともに、これを使用する文章に、價值ある内容が付與せられたのである。

更に貫之は、假名文字で以て土佐日記を書いた。これも亦、思ひ切つた英斷であつた。土佐日記の體裁は、全く男子の漢文の日記をそのまま、假名文に變へたやうな所があつて、未だ十分に假名を用ひた文章としての妙を發揮するには至らなかつたが、その素朴な中に、貫之の苦心や氣慨やは、十分に汲み取ることが出来る。かやうにして、假名は文章を書く場合にも廣く用ひられるに至つたが、これは貫之が日本文化の上に及ぼした大きい貢獻である。

貫之が信念の人である事は、その歌道に對して信ずる事厚いのによつても明かである。土佐日記には、阿部仲麿の話を書いて、仲麿が支那からわが國に歸朝の途に上らうとして、かの國の詩人達と別れを惜しんだ時、美しい月が海上に出たのを眺めて、わが國には、かゝる歌なん、神代より神も詠み給ひ、今は上中下の人も、かやう

に別惜しみ、喜びもあり悲しみもある時には詠むと仲麿が云つて

青海原振り放け見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

と詠んだが、もとより支那人に分らうはずがないので、その意味を漢文に譯して示した所皆感心したといふ意味の事を貫之は書いてゐる。これは謡曲にある、白樂天と住吉明神とが、漢詩と和歌とで争つて、遂に白樂天が負けて逃げ歸るといふ思想と同様に、此の貫之の書いた事がらの中には、異國にあつて和歌を忘れず、漢詩にまさる和歌の趣をも示してゐるのであるが、そこに、貫之の歌道に對する信念のほども窺はれる。更に古今集の序文に至つては、その歌道に對する蘊蓄と信念との全部を披瀝したものと云ふ事が出来る。

しかも、貫之は、和歌を以て單に軟弱なる文學とはしなかつた。彼は末の世に和歌が墮落して、あだなる歌はかなき言のみ詠み出される事を慨嘆し、さういふ風になかつた古い時代を理想とした。さうして、和歌は、天地を動かし、神祇を感じしめ、人倫を厚うし、尊敬を成し、義を教誡の中に取る者であると云つて、和歌に道德的意義をさへ賦與しようとした。

貫之が誠實な歌人であり、牧民官の職にありながら文學の興隆に努力し、假名文字を以て文化の殷盛を將來するに至つた功績は、遠く後代にまで連るものがある。さうして、さういふ貫之の一生を貫くものは、民族が作り、民族が生んだものを尊重し、民族の血統につながるものを愛してやまざる精神であつた。假名も歌も、すべてわれわれの祖先がその心と魂とをかける事によつてあがなひ得られた民族の文學、民族の文化である。

十一、紫式部

平安時代の女流文學を代表するものは紫式部である。紫式部は、源氏物語を以て世界に誇る古典を我が國に存在せしめた。世界の文學の歴史の上で、源氏物語の如き長篇であり、すぐれた内容を持つ作品を、小説とよばれるべき文學を、當時は未だ何國も持たなかつた。これはわが國の一女性によつて始めて創作せられた

文學である。源氏物語の全部の英語譯は、既に久しい間、世界の讀書界に讀まれて、その眞價が認められつゝある。

源氏物語の長所を語る事は容易である。今少しく、此の作の非難せられる方面について考へて見る。源氏物語の難ぜられる所は、重要なものが二點ある。一は皇室に關しまつる事であり、二は不倫の内容を持つ點である。

一について、もし紫式部が皇室に對しまつり不敬の考へを抱くものであるならば、いかなる長所があつても、此の作品は、わが國家と相容れないのであつて、さういふ論者が、一應此の作品の文藝的價値を認容するが如きは矛盾してゐる。

源氏物語の主人公は、第二皇子であらせられ、後、臣下に降られた方である。此の物語の中心人物をかやうな位置の方とした所に、むしろ作者の甚深な用意があるのである。何となれば、此の主人公は最も理想的な典型的人物として描かれてゐる。さういふ方を藤原氏として點出するやうな事をも、紫式部が試みたとしたなら、それこそ作者は糾弾せらるべきであらう。

併し、かゝる理想的人物は、皇族であらせられる事を必要とした。たゞ作中における活動の必要上よりして、皇族から源氏に降下あそばされる事と構想を作つたのである。さうして、源氏君は、一時藤原氏の爲めに壓迫を受けるが、しかも遂に困難を脱して藤原氏以上に最上の榮位に付き、反對に藤原氏を壓倒する事となる。かういふ内容が、望月の缺けたる事もなしと自負した藤原道長の時めく時代に作り出されてゐる事を考へれば、作者の意中は、おのづから諒解出来るものがあるではないか。

まして、紫式部日記によれば、寡婦である紫式部に對し、道長が執拗に挑んだ事があつたが、式部は遂にこれを拒絶し通して許さなかつたのである。これらの話を思ひ合せれば、紫式部の凜然たる志操は益々明かとなる。

然らば、さういふ理想的人物をして、何故作者は不倫な行爲を行はしめたのであるか。もしさういふ重大なる過誤を犯したにかゝはらず、作中の人物が何ら反省する所がないとすれば、これは不道德を勧める書として、文藝的價値も亦抹殺せら

るべきである。併し源氏君の一生を貫いて、此の若い時代の運命的な過誤が、良心の苦惱を齎すのである。その過誤が重大であればあるほど、良心の苦惱は一層切實である。かくて源氏物語の主人公は、苦痛の一生を終る。表面上幸福さうに見えるが、源氏君の心の中は必ずしもさうではなかつた。源氏物語の始めの方だけを知つて、後半の源氏物語の意義ある部分を知らない人が多い。源氏君は、後半生に至つては、忌はしい婦人関係も全くなつてゐる。此の前後の對照の上に、作者の眞意を見なければ、本當に源氏物語を讀んだものといふ事は出来ない。

それで、恐れ多い御事ではあるが、後水尾天皇は源氏物語の註釋書を書き残し給ひ、皇室におかせられて、此の物語を研究し給うた御事は甚だ多いのである。

源氏物語は、さういふ變轉極まりなき人生の深味を、しみ／＼と感じさせてくれるが、その他に、作者の種々の思想が端的に現されてゐる。例へば、源氏君はわが子に六位の位を興へる。普通ならば、もつと高い位を始めから興へる所であるが、わざと普通人と同じ低い位を興へるのである。それから教育も、普通の人と同じ學

舎に送つて、同様の教育を受けさせる。それが爲め、他の身分高き貴族から卑しめられ、恥かしめられるやうな事もあるが、源氏君は自分の信ずる教育法をやり通す。かういふ子供の鍛え方や教育觀を、看過してはならないのである。

源氏物語は決して讀者を墮落させるものではない。反對に、これを眞實に讀む者は、正しい人生を送る事の出来る人である。源氏物語はわが國民の正しい生き方を教へてくれる。まして、紫式部日記において、皇室の御榮を心から喜び奉り、源氏物語で、藤原氏よりも、源氏を上にするやうな所にも、作者の意中を認める事が出来る。とすれば、さうして、此の作品が、まさしくわが國の世界に誇る藝術的價値を持つものであるからには、これを以て、わが民族文學上の、巨大なる光芒を放つ星座となす事は自然であり、又、それに値するだけの眞價を當然持つものと敢て斷じる事が出来るのである。

十二、清少納言

紫式部は温和な人がらで、清少納言は冷い皮肉味の多い人間であるといふことに、一般には考へられてゐる。さうして、紫式部が情に厚い趣味豊かな人であるとすれば、清少納言は理智的な人であつたと解釋せられる。

それは必ずしも誤まつてゐないであらうが、併し、それだけで人物の性格を片づけてしまふことは不可能であらう。人間の心の動きや行爲といふものは複雑であるから、一概に云つてしまふ事は出来ないのである。紫式部にしても、その日記に、他の女性を随分痛烈に批判した所があるのを見ると、濃厚な情味のある人とかかりも云へないのであつて、又さういふ所に紫式部の人間味を見ることが出来る。と云へば云ふことも出来る。

清少納言の場合でも、少し愚直な中宮大進平生昌を嘲弄してゐるやうな部分だけを見ると、いかにも皮肉で冷徹な婦人と云はれるであらうが、直ぐその次に、翁磨

といふ犬が叩かれるのをかばふ話を記してゐる所を見ると、やはり清少納言も女らしい同情に富む人であつたといふやうにも考へられて来る。つまりその時々によつて、心の動きが變化して、或時には皮肉にも現れるし、又或時には暖くも現れるのである。

枕草子を通じて感じられる事は、中宮定子に對しまつる、變らざる讃仰の念で、清少納言は、中宮より種々の恩顧を蒙る事に、此の上もなく感激の情を抱いてゐる。人から第一に思はれる事を誇とし、二三にては死ぬともあらず。一にてをあらんなどと云つてゐる所は、いかにも勝氣な清少納言の性質を現してゐるが、しかもさすがに中宮に對しては、下品であつても結構ですと、お答へ申上げてゐるのである。清少納言は、やはり信する人に對しては、一個の誠實な女性に過ぎなかつた。相許すに足らぬ相手に對しては、押しかゝるやうな態度をとる清少納言も、眞に尊敬されるべき人物には、敬慕の情を捧げるにやぶさかでなかつた。中宮の御乳母なる大輔命婦が日向へ下るに當つて、中宮は饞別を賜ひ、又、

あかねさす日に向ひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすらんと
といふ歌を贈られた。此の事を録してさる君を置きたてまつりて遠くこそえ行
くまじけれ」とも清少納言は記してゐるのである。

中宮定子の御一家へ、壓迫を加へてゐたのは藤原道長であつた。併し清少納言
は、道長の傍若無人な思ひ上つた態度が、勝氣な點において清少納言の性格に通じ
るものがあつたためか、ひそかに尊敬の情を寄せてゐたのであつて、他の中宮方の
女房が、感情的に道長を嫌忌してゐるのとは、稍異なる心持であつた。それゆゑ、他
の人々からは、異端者視せられて十分なる好意を持たれてゐない清少納言なので
あつた。しかも遂に最後まで、清少納言は中宮にお仕へして、道長の壓迫のもとに、
中宮の御一家の日ごとに寂しく勢力を殺がれて行く孤壘を守つてゐた。かくて
中宮の他界せられたのち、清少納言は、遂に他の方に仕へる事なく、身を退いて宮中
を出て行つたと思はれる。次の中宮は、道長の女なる影子が立たれたが、清少納言
は、此の方にお仕へしなかつたやうである。

さうして、晩年は零落して、掘立小屋に住んで餘生を送つたとも傳へられる。そ
れは單なる傳説に過ぎないが、中宮定子の薨去と、その御一家の没落が清少納言を
不幸にし、零落させたのだといふ事も出来る。ひそかに尊敬してゐた道長の方に
仕へて、自己の榮達をはかるやうな事の出来ない清少納言であつた。

勝氣であり才氣ばしつてゐるとともに、一面女らしい情のもろさと、生一本なほ
ど愚かしい誠實さがあつたればこそ遂に晩年を不幸にした清少納言なのである。
かやうに見てくれば、清少納言に對する一般の評價も亦、稍異なるものが當然なけ
ればならないであらう。

枕草子は、自然美に新しい解釋を與へるとともに、人間生活に新しい美を發見し
た劃期的の書である。和歌で詠まれた自然の抒情的美感に、これは新しい知的構
成を與へてゐるのである。情緒の世界に理智の眼をもつて、新鮮なる美を見出し、
そに文學の進むべき方向を開拓しようとしたものである。單なる機智を弄し
た安つばい洒落の文學と異なる事は勿論である。

就中、上古より見出されてゐた四季をり／＼の日本的な自然美のうつりかはりを、廣汎な部面と種目にわたり、これほど鮮明に鋭敏な感覺をもつて反映した文學は出でなかつた。わが民族文學の持つ自然美の文學は、枕草子によつて新しく意義づけられたものである。萬葉集以來の抒情の世界の自然美は、此所に至つて、知的隨筆の世界のうちに、みづみづしい感覺をもつて生きて來た。「春はあけぼの」夏は夜」「秋は夕ぐれ」さうして「冬は早朝」と情趣美を分析し、あらたに構成して、われらに日本の自然美の眞實の價値を覺らせてくれたのが清少納言であつた。紫式部の人情美の世界に對して、清少納言の自然美の世界は、わが日本文學の一つの道を明かに切り開いて、行く手を示してくれた大きい指標である。

十三、西行

何事のおはしますかは知らねども忝なさに涙こぼるる

此の名高い西行の歌は、皇大神宮に詣でて、御祭日に謹詠したものである。もし

此の歌を、大神宮の御神を存じ上げないが、たゞ神域の崇嚴なるに感涙を流した、といふやうに解釋するなら、作者は國民として缺ける所があるといふやうにもならう。併し、此の上句は、さういふ意味ではなく、御本殿を遙に仰ぎ奉り、その内部の事はもとより知るを得ないが、玉垣の外に額づく時、たゞ有難く身心の清められる思ひがする事をかく詠じたものであつて、その感動は、わが國家における歴史の體驗と直接に結びついてゐる事を必要とするが、皇大神宮に參詣した人々は誰でも、此の西行の作に共感の念を強く起すのである。それで、此の作の如き、既にわが國民の普遍的な感情に觸れて居るといふ事が出來よう。

皇大神宮における西行の作は他にもある。

神路山月さやかなる誓ひありて天の原をば照らすなりけり

宮柱下つ岩根に敷き立てて露も曇らぬ日の御影かな

限りなき月日の光りに、國體の象徴を認めるとすれば、これらの西行の作の如き、詩的な表現を以て、國家觀念を歌ひ得たといふ事も出來る。

西行は 鳥羽上皇の北面の武士であつた。即ち俗人であつた時の佐藤義清は、皇室に親しくお仕へ申し上げてゐるとともに、又禁闕を護衛申し上げる大任にあつた武士なのである。西行の精神は、此の二つの體驗を除いては眞實に解釋する事が困難である。

西行は、崇徳上皇の御眷顧を頂いてゐた。所が保元の亂に於て 上皇が不利な立場となられ、遂に讃岐に遷られて崩御あそばされる迄、常にその御運命を悲しみ、御身の上を愁へ申し上げてゐるのである。上皇が剃髪あそばされた時、西行はかかる世に影も變らずすむ月を見るわが身さへ恨めしきかな

と歌つて、痛切な悲歎の情を述べた。さうして、遂には讃岐なる白峰の陵に詣でて、心より哀悼の意を表し奉つた。

西行が出家した動機はよくわからないが、青年時代、友人と一緒に郊外に行つた時、落雷の爲め、隣にゐた友人は死んだのに、自分だけは助かつたので、そこに運命の神祕を感じたからであらうと云ふ。それは一つの語り草に過ぎぬかも知れない

が、西行の多情多感な性質を示すために傳へられた物語である。

かくて、西行の長い求道の生活が始まる。一所不住の出家の身は、岩を枕とし、草を褥として、寂しさに徹しつゝ、たゞ自然を友とした生活を送る。それは又、烈しい身心の練磨でもある。さうして、その寂しさに堪へ、忍苦の業を積んで、修行の苦痛を超越する境地に達した時、始めて、彼らの人間が輝かしい光を放つ事になる。西行も亦さうした僧侶の一人として生活し、その徒の間に身を投じたのである。

西行の長い修行の生活は、武士的精神によつて得られた烈しさ強さを具へてゐた。さういふ武士的精神は、次のやうな逸話にも現れてゐる。荒僧文覺は、かねがね西行が僧でありながら歌を作るのを不純なりとして甚だ憎み、もしどこでも西行に出會つたなら頭を打破つてやらうと云つてゐたが、或時、その文覺の所を西行が訪ねて來たので、弟子達はどうなることかと、ひそかに心配してゐた所、何事もなく、文覺は西行を饗應して歸した。あとで弟子がそのわけを尋ねると、文覺は、

「あれは文覺に打たれんする者の面様か、文覺をこそ打たんする者なれ」

と答へたといふ話が語り傳へられてゐる。即ち、さすが不敵の文覺も、西行の威容に壓せられたので、これに屈服したといふのであるが、そこに西行の武士的な氣魄と、修行によつて磨かれた人格の高さとが世の中からは長く認められてゐた。

西行は寂しさに徹した時、始めて自然の言葉を聞く事が出来た。自然の溫容に微妙な感情の宿つてゐることを知つた。西行は、日本の自然の美しさ、尊さに心から頭を下げた。かくて、西行は既に、自然の愛のふところに浸り、自然を友として、寂しさを超えた、靜寂の境地に住してゐたのである。日本の自然を發見した詩人は、始めに赤人があり、後に西行がある。たゞ赤人が、自然に對する執着を女性的な溫和な愛情で示してゐるのに比すると、西行の方はもつと徹底した宗教的な心境にまで悟入してゐる。

願はくは花のもとにて春死なんその如月の望月の頃
といふ強い熱意が、遂には、西行の死の豫言ともなつたのである。

自然を愛する感情は、日本人に流れてゐる一つの血潮であるが、その烈しい噴

出が、詩的な精神に装はれて、赤人や西行やの如き人々を出してゐるのを見る。さういふ意味で、これらの詩人は、民族文學の系譜の一つの流れを示すものである。西行の宗教的悟道と和歌との關係は、わが國の精神生活の在り方を示す一つの形である。西行的な生活のし方は、後長く、わが民族の間に流れてゐる。さうして既に西行は傳説中の人物としても民族の間に生きてゐるのである。

十四、慈 鎮

慈鎮は謚號で、慈圓がその法名である。

慈鎮は攝關家の出で名門の家がらであつた。さうして、佛敎界の最高位である天台座主の地位にまで上つた人である。併し、もとより私が此の歴史の中に慈鎮を加へたのは、さういふ家門や地位によつてではない。むしろ、家門や地位やは、純眞なる國民として、赤裸の人間として、その人を見る時、しばらくこれらのものによつて毒され、害される事が多くあつても、それによつて、その國民的自覺なり、人間的

資性なりを高められる場合は、少いのである。さういふ中であつて、慈鎮は僅少なる例外の一人といふ事が出来るであらう。彼は家門や地位に拘はらず、國民的信念を深く抱き、藝術的情熱に燃え、さうして民族文學として價値を有する業績を残して、此の世を去つたのである。それ故に一層彼の價値は認められるべきである。慈鎮の和歌に對する好愛の情は非常に熱心なものがあつて、近親の中にはこれを憂へて諫める人もあつたが、彼は更に意としなかつた。さうして、煩忙な職責に努めるかたはら、詠歌口吟を絶たなかつたのであつて、その作品を集めた老大な歌集を残してゐる。しかも、その作の中には秀吟が多く、彼は新古今時代第一流の歌人であつた。

當時の一流の歌人はいづれも知友として交りがあり、西行が圓寂した時には、その宗教家らしい臨終をたたへて、

君知るやその如月と云ひおきて言葉に送る人の後の世
といふ歌を詠んだりしてゐる。

朝廷の御爲めには、その職責よりして、御祈禱をお勤めする場合が多く、至尊の御不例の際などには、特に至誠を以てお仕へ申上げたので、御信任を得てゐた。

一方、彼は又鎌倉幕府の將軍實朝とも好誼があつた。實朝も亦歌を好むとともに、その作の中に國民的氣魄の表現せられてゐる點においては、當代の第一人者であり、その點においても、兩者の魂に相觸れるものがあつたに違ひない。さうして京都と幕府との對立感情の中にあつて、慈鎮はまさに安全辨の役を勤めてゐた。歌によつて結ばれた慈鎮と實朝の交友は、又政治的な意味を持つものであつたが、包容力のある慈鎮と、青年の熱情と忠誠の念に燃えてゐた實朝とが世を去つて、遂に時代は一回轉せざるを得なかつたのである。

慈鎮の高僧らしい風格と佛教徒としての高い信念とは、百人一首にも入つて名高い

おほけなく浮世の民に被ふかなわがたつ袖に墨染の袖
の歌にも見る事が出来る。

彼には「君が代」をたゞへまつた歌や又、皇大神宮をはじめまつり、神社に捧げた歌も多く、その他取材の多方面と表現の自由と、それに感受力がこまやかでありながら速吟口をついていづる創作の速さとにおいて、歌道では、まさに一流の能才、達人であつた。

併し、たゞ歌人として彼を見るだけでは、未だ十分でない。彼の鋭い頭脳は、一面において彼を良心的な歴史家たらしめた。彼の創作能力の廣く大きい事は、これによつても明かである。藝術家であり、同時に學者である所に、彼の人物のすぐれた所以がある。しかも歴史家としての彼は、民族の共感に生き、國家の歴史的傳統を明かにする事によつて、わが日本の運命を見つめ、その生命に觸れてゐるが故に意義を持つ。冷靜な批判ではなくて、そこに彼の國民的信念を感じる事が出来るのである。

「愚管抄」こそは、まさにわが日本が持つた歴史的研究所の最初の勞作と云つてよい。たゞ彼の歴史觀が、その長い佛徒の生活より得た教養によつて、幾分の歪曲がある

事は、免れぬ所であるが、併しその歴史觀の根本的觀念において、彼は外來思想の奴隸とならず、誤つた方面に逸脱してゐるのではない。正しい國民的信念の中にこれが生きてゐるが故に、高い價值が賦與せられるのである。例へば「日本國ノナラヒハ國王種姓ノ人ナラヌスヂヲ國王ニハスマジト神ノ代ヨリ定メタル國也」とか、支那に對して「コノ日本國ハ初ヨリ王胤ハホカヘウツル事ナシ。臣下ノ家又定メオカレヌ。ソノマ、ニテイカナル事イデクレドモケフマデタガハズ」とか、或は又、天皇が「ワガ御心ヨリ起リテ、オリナントモ仰ラレヌニ、オシオロシマキラスベキヤウナシ。コレヲ云ゾカシ謀反トハ」とか直言してゐる所にも、當代の社會や政治の事實に對する痛烈な批判が認められ、さうして、萬世一系の皇統を戴きまつる所にわが國體の本源がある事を知り、此所から歴史觀の發してゐる事が考へられるのである。さういふ所は、他にも本書の中に種々指摘出来る。たゞ百王思想や末法思想に災せられてゐる所が明かであるが、それは平安時代末期の陰慘な世相が彼の心に影響したがため、武家の專政に對して、親政の確立を企圖するだけの識見

と情熱とを缺いてゐたのは遺憾であつた。

併しながら、歌と歴史、藝術と學術とを、正しく國民的見地から發揚した人物として、慈鎮は民族文學の歴史の上で異彩を放つてゐるのである。

十五、源 實 朝

昭和十四年五月二十二日、青少年學徒に賜はりたる勅語を拜誦して、恐懼感激措く所を知らず、われ／＼に取つて實に教育勅語以來の重大意義を有する勅語である。たゞひたすら奉公の至誠を盡して、聖意に添ひ奉らん決意を固くしたのである。

私は、源實朝の有名な歌を、新しく思ひ出した。それは、太上天皇御書下預時之歌と題された

大君の勅を畏みちゝわくに心はわくとも人に云はめやも

ひんがしの國に我をれば朝日さすはこやの山の蔭となりなき

山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心我あらめやも

の三首である。太上天皇は、後鳥羽上皇の御事で、上皇から何事かの御内意を賜はつた時に、自己の決意を披瀝した歌で、ちゝわくにはいろ／＼様々にの意、第二首の歌は、東國鎌倉にゐて、仙洞御所なる、上皇の御恩恵を頂いた事を、衷心感謝申上げる意の作である。

此の三首を通じて、實朝は、萬葉集にも多く見られないほどの高い國民意識を歌ひ上げてゐる。萬葉集以後、和歌は平安時代の抒情の世界に沈湎してゐた。それが鎌倉時代の初に至つて、再び國民精神の昂揚が認められる時期に到達したのである。平和の時代よりも、國家的盪搖の時代、轉換期の疾風怒濤が荒れ狂ひ、激情の嵐の渦巻く時代、さういふ時代においてこそ常に國家的精神は奔騰するのである。さうして、實朝は將軍の顯職にあつて此の忠誠を誓ひ、それを高い格調の歌を以て強く叫んでゐる。青年將軍の情熱が、國民としての感激によつて燃え立たされ、いみじくもそれが詩の世界に晶華されたのである。われわれも亦、昭和の現代にお

いて、勅語を拜し、實朝と同じ感激を體驗し、同じ情熱を感じる。さうして、實朝の歌が脈々として、われわれの胸によみがへり、その淨らかな聲が響いて來るのである。實朝の歌は、萬葉調の再現であつた。同時にそれは國民精神の再興である點において、萬葉集と共通したものがあつた。歌の表現が精神に密接な連繫のある事かくの如くである。

實朝が幼き子供を同情して詠んだ、

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ぬる

に見られる愛、或は

瑞垣の久しき代よりゆふ禪かけし心は神ぞ知るらむ

に見られる信念、更に又、叙景の歌にしても

大海の磯もとどろによする波われて碎けて裂けて散るかも

に見られる男性的な豪宕の趣など、實朝の秀歌をあげれば幾らでもある。併し、これらの歌を通じて、常に實朝が、誠實な精神を以て、力強く生き抜かうとしてゐた努

力が認められ、そこに、時代は下つても、上代的な、素朴、純粹の精神生活が復活して、生きて働いてゐた事が甚だ重大な意味を持つ。かくて、實朝の文學は、上古以來、日本人としての最も高い傳統を持つ民族文學の位置にある事が理解せられるのである。

尤も、實朝の歌にしても、時代の風潮と同じき駄作も少くない。併し、さういふ多くの駄作を作りながらも、一方において、かく毅然として高く聳える秀歌を多く作り得る精神の緊張と誠意とが尊いのである。

實朝は、政治家としては失敗であつたらう。優柔不斷と云はれ、神經質であつたと云はれる。さうして、遂に頼朝の開いた源氏の幕府を斷絶せしめるに至つた。併し、それは權謀術數を旨とし、奸佞邪智なる策謀を事として、自家の福利を計る徒がすぐれた政治家であるとせられる場合にのみ云はれる事であらう。室町幕府の基礎を置いた足利尊氏の如く、徳川幕府を開いた徳川家康の如く、藝術家としての實朝の魂は、これらの徒とは違ふのである。従つて實朝が政治家として失敗

であつたといふ事は決して實朝にとつて耻ではない。のみならず却て實朝の爲には此の上なく名譽な事である。何故ならば實朝は、通俗な意味での偉大なる政治家ではなかつたが故に、第一流の藝術家になる事が出来たのであり、何よりも、忠節なる國民として生きる事が出来たからである。

十六、藤原家隆

新古今集の編纂に協力した人々の中に、藤原定家と藤原家隆とがある。家隆は定家よりも、四歳の年上であつたが、人と争はず、温厚の君子の風格ある家隆は、才氣に満ちて、しかも勤勉弛まざる定家に推譲して、すべてを定家に委ねたのである。定家は、歌に熱心で、刻苦して独自の歌風を開いた。非常な勉強家で、平安時代の古典を、多く自ら筆寫して世に残した。彼は五十六年にわたつて日記を綿密に書いた。これを「明月記」といふ。彼の精力家である事は此の一事でもわかる。要するに、彼の精勵と奇才とは認められるべきで、そのわが國の文化の發展に寄與した

事、尠しとしない。定家の書寫した書物の恩恵で、平安時代の價值ある典籍が湮滅から免れ、當時の文化を現代の人々にも知らしめる機會の與へられたものも亦數が多い。

定家の文學上の功績の偉大なる事は否定する事が出来ないが、併し、彼は拭ふべからざる過失を、重大な過失を犯してゐる。

後鳥羽上皇は、甚だ歌を愛し給ひ、その御監修のもとに、五人の撰者によつて、新古今集が編纂せられた。かくて新古今風と云はれる豊潤な情緒と微妙な感覺の中に、雄大な趣を湛へた歌風が完成せられたのである。その集には、上皇の御製も數多く收載申上げてゐる。

五人の撰者の中、定家は最も手腕のあつた人で、撰集の爲めにも努力してゐる。併し、本集においては、何よりも、後鳥羽上皇の御意見が有力に働いてゐるのである。然るに、新古今集について、定家は獨力で勅撰集の編纂に當つた。これが新勅撰集である。此の集になると、新古今集の絢爛たる特色は薄れて、色あせたる歌風

に落ちてゐる。此の新勅撰集には、承久の亂の結果、鎌倉幕府の執權北條氏の爲めに、長くも、遠國に遷幸し給うた、後鳥羽上皇、土御門上皇、順徳上皇の御製は一首も拜誦することがない。しかも、御三方とも、特に和歌を好愛し給ひ、詠作にすぐれさせられてゐたのである。さうして、鎌倉の武士の作が多く入つてゐるといふので、武士の八十字治川の歌により、此の集の事を宇治川集といふ異名が行はれた。それで、當時既に、定家の兄弟なる一人の女歌人は、此の集について、取りて見たくだに候はざりしものにて候といふ憤慨の書簡を書いてゐる。これは鎌倉幕府に憚かつての定家の處置であつたらう。

定家は、新古今集編纂の事その他で、長く、後鳥羽上皇の御眷顧を蒙つてゐた。然るに、承久の亂の後には態度が一變して、鎌倉方に親しまうと努力してゐる。さうして、隱岐の島なる、後鳥羽上皇をお慰めする所がなく、關東武士の機嫌を取る事に努めてゐた。その上、晩年の定家は、最早一個の藝術家といふよりも、古典に親しむ學者的な生活を送つてゐたのであつて、歌人として大切な熱情を既に冷却して

ゐたかに見える。さうして、藝術家としての矜持と情熱とを失つて、社會的名譽の爲めに生きてゐるのに過ぎないのである。

藤原家隆は、定家のやうな才人ではない。後鳥羽上皇は、その御口傳において、定家を評し給うて、傍若無人のわがまゝな行動に對し、歌いかにいみじけれども、異様のふるまひしてと申され、又、あまつさへ種々の過言、却りておのれが放逸を知らざることも申されてゐる。それに對して、家隆の事を、若かりし折はいと聞えざりしかど、建久の頃ほひより、殊に名譽も出來たりきと記し給うてゐるのは、その功名をあせらない寛厚溫和の風が忍ばれる。

さうして、隱岐に遷幸の後、上皇をお慰め申上げた者は、實に家隆であつた。増鏡に、家隆の二位は、新古今の撰者にも召し加へられ、大方歌の道につけて、睦まじく召使ひし人なれば、夜晝戀ひ聞ゆる事限りなしとて、家隆が遙なる隱岐の上皇の御恩徳をひたすらお慕ひ申上げて、長文の御手紙を差上げた事を記してゐる。

かくて、隱岐の上皇は、その御つれづれを慰め給ふ爲めに、御製や臣下達の歌を

集めて歌合を試みさせ給ひ、御自らこれに御批評を加へ給うた。都で臣下の作を集める事を命ぜられたのは實に家隆その人で、彼は直ちに人々に歌を乞ひ集めて、隱岐へ御送り申上げた。かくて「遠島御歌合」を編纂し給うたのであるが、此の中には、勿論家隆や又その女の歌なども入つてゐるが、定家の歌は見えない。歌を差上げなかつたか、或は、初から。上皇が、定家を除き給うたかのいづれかであらう。

家隆の作

ものゝふの新島守も心あらば君に悲しき月や見るらむ

は、後鳥羽上皇が隱岐で詠み給うた御製として名高い

我こそは新島守よ隱岐の海の荒き浪風心して吹け

といふ痛歎に堪へぬ御作に和し奉つたもの、或は

水無月の神も受けずやなりぬらん今日の御禊はする人もなし

も、世情を慨しての作である。かくて、温厚な家隆は、ひそかに慨嘆しつゝ寂しい餘生を送つて世を終つた。その訃音を知り給うた隱岐の上皇の御心中は察し奉

るに餘りがある。家隆歿後の翌々年に後鳥羽上皇も浪風の荒い隱岐の島で崩じ給うた。さうして昭和十三年が丁度その御七百年に當るのである。(崩御の翌年より數へると昨年即ち昭和十四年が御七百年となる)

實朝が歿し、源氏の幕府亡んで後、まさに世の中は一變した。文學の世界においても然りである。あへて、此所に定家より家隆の名をあげる所以である。

十七、日

蓮

平安時代末期の、大いなる變動期が、心ある人々に及ぼした影響は、もとより實に著しいものがあつた。さうして、それはむしろ消極的、否定的な心の打撃となつて現れた事が顯著であつた。その代表的なものを、鴨長明の「方丈記」とする。

「方丈記」は、當時の世相を叙して、あらゆる天變地異をあげてゐる。彼は、一夜の中に都が灰となつた大火の事を記した。都の家々を卷上げた颯風、颯風の事を記した。平家によつて企圖せられた福原遷都のはかなさを記した。飢饉、疫癘、こもこ

も至つて、かく佗びしれたる者ども、歩くかと思れば即ち倒れ死ぬ。築地のつら、路のほとりに飢え死ぬ類は數も知らず、取り捨つるわざもなければ、臭き香、世界に満ち／＼て、變り行くかたち有様、眼もあてられぬ事多かりといふ、慘憺たる都市の狀態を描いた。かくて京都中の死屍は四萬二千三百餘に及び、ついで元暦二年の大震災によつて、一層の凄慘なる狀態を加へた、當時の世相生活を描いてゐる。

かやうな困難な時代に遭遇して、長明の取つた究極の生活態度は、すべて世の人の住家を造るならひ、必ずしも身のためはせず、或は妻子眷屬のために造り、或は親昵朋友のために造る。或は主君師匠、及び財寶馬牛のためにさへ是を造る。我今身のために結べり。人のために造らずとて、世の人情の頼むべからざるを説き、自分の生活が人に迷惑をかけず、と同時に又、人からも煩はされない、社會から隔絶した自分一個の生活に閉ぢこもる樂しさに入つてゐるのである。これが此の變動期における、一個の有識者の到達した諦念であつたのである。

かくて、長明の如き、逃避者、隱遁者が續出する。長明はまさにその思想の代表者で

あつた。個人的な、自分一個の生活と心境の中に閉ぢこもらうとする。此處に敗退的な廢類とは異なる、個人主義、極端に云へば、利己的觀念に近い思想の興起を見得る。極端な窮乏と、恐るべき困難の續出が、都會の人間に襲ひかゝる時、これを凌ぐ事が出來ず、打ちひしがれた都市の人間の魂の求めたものは、人を顧みず、まして國家を顧みず、自分一個の安全を防護する逃避所であつた。

長明より、六七十年遅れて世に出でた日蓮の時代に至つて、併しながら、社會はまさに變りつゝあつたのである。それは平安時代末の、末期的な悲觀的態度でなくして、それは既に、一轉して、積極的建設的意圖に進みつゝあつた。此の民衆の魂の要望に應へて、これを救ふべく世に現れたのが、日蓮であつた。實に日蓮こそは、時代の先驅者であるとともに、當時の國民の魂の代表者であつた。

日蓮の時代に至つても、決して、世相はよくなつたのではない。困難は必ずしも緩和せられてゐない。しかも、日蓮は立つて、いたづらに逃避的、消極的、利己的、安穩無事的な、個人的救済の教を打破し、勇猛心を燃え立たせる、國民の精神的振起を促

した。しかもそれは、その基底として、國家的なものと結びついてゐた。國家を根基とする所にはじめて國民の強い立ち上りの可能性がある事を、日蓮の誠實な精神は、早く諒知してゐたからである。かくて日蓮は、平安時代末の末期的な時代精神の要求に應じて起つた法然の個人的な教を批判する事によつて、新たに積極性のある國家的な教を起立した。

「立正安國論」の初に記されてゐる「旅客來りて歎いて曰く、近年より近日に至るまで、天變・地異・飢饉・疫癘遍く天下に滿ち、廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、既に大半に超え、之を悲しまさるの族、敢へて一人も無し。……然りと雖も、唯肝膽を摧くのみにして、彌飢疫に逼り、乞客日に溢れ、死人眼に滿てり。屍を臥せて觀となし、尸を並べて橋と作す」といふやうな悲惨な描寫は、「方丈記」の前半に記された天變地異の記事に直ちに接續するのである。此の長明と同じ所から出發した日蓮の思惟は、併し、長明と全く異なる方向に發展する。

日蓮は、かゝる天變地異の續出を恐れず、むしろ敢てこれを肯定して、それに立ち

向ふ人間の精神力の強い抵抗に思ひを致し、かくて社會惡の除去、正義、正道のみがあらゆる困苦窮乏を克服し、それから國民を救ひ出す唯一の方法である事を考へて、所詮天下泰平、國土安穩は、君の樂しむ所、士民の思ふ所なり。夫國は法に依りて昌え、法は人に因りて貴し。國亡び人滅せば、佛を誰か崇むべき。法を誰か信すべきや。先づ國家を祈りて法を立つべし」といふ結論に到達したのである。これは佛法を主とし、國家を従とする意見の如く考へられ、未だ十分國家的精神の成熟を示してゐないが、しかも、日蓮が、かゝる國家的佛教の考へに到達した事が時代精神の目覺めを示すものとして、その積極的な情熱と決意と共に、存在意義を有する所以である。

しかも、時は既に元寇の國難が近づいて、一層に國民の精神の緊張充實と一致團結を必要とする時代となつてゐた。日蓮の文章に溢れてゐる情熱と、その内容となす國家的精神とは、かゝる意味において重要な民族文學の一章に加へられるべき性質を持つものである。

十八、宗良親王

危機がすぐれた文學を生む動力であるとすれば、吉野時代と幕末維新時代とに最も高い價值を有する和歌が現れた事は、極めて當然であらう。平安なる生活のもとにおいては、到底到達する事の出来ない烈しい情熱が燃え立ち、強い至誠の心も亦動くのである。さうして、それはあらゆる困難に堪へつゝ、一意君國の爲めに、身命を捧げて努力する實踐と相俟つて、始めて、その高い詩情に到達する事が出来たのである。

行動が藝術と堅く結合してゐる事の強き實證は、此の二つの時期に見られるほど明かなるものがない。不正不義なる重壓が、わが國家の大道の爲めに、搖がぬ信念を以て行動する志士に襲ひかゝる時、魂の地熱の烈しい爆發が一首の和歌となつて表現せられる。

胸中に蓄へられた憂悶の情が、此の一首に籠められるのであるから、それは、満身の力に溢れた作品となるのである。その氣魄と精神の集中とが、平穩無事の境遇における作品とは異なるものにするのである。

吉野時代の歌人の第一人者が、後醍醐天皇の皇子、宗良親王であらせられた事は、特に意味がある。金枝玉葉の御身で、東奔西走、官軍の爲めに、異常な努力を傾注あそばされた。北越から南信の山間僻地に流寓せられる事數十年の長きにわたつて、吉野の朝廷の興隆を企圖せられ、實に普通の國民でも經驗する事少き辛酸を嘗め給うた。

吉野の朝廷を守らんが爲め、御みづから率先して臣下達に、苦難に堪へ給ふ範を示されたのである。しかも親王は、かゝる長き困難の御生活の中にあつて、少しも御心のうるほひを失はせられなかつた。豊かな御詩情を、常にたやし給ふ事がなかつたのである。土をかき分けて、滾々と涌き出でる、清冽な泉の如く、勞苦と缺乏の御生活の間から、強き情熱と高き詩品に溢れ、至誠の凝つた多くの御歌を作り出し給うた。

雁だにもしをれてぞ鳴く越路までさすらへし身を思ひやらなん
ここよりも吉野の山の山あらしは寒くあらじと思ひやりしを
の如き、悲痛な御歌には切々たる哀調が湛へられてゐる。その寂しい邊境の御生
活は、

へだてゆく伊那野の原の夕霧に宿ありとても誰か訪ふべき
まれに待つ都のつても絶えねとや木曾の御坂を雪埋むなり
の如き御歌によつても、窺ひ奉る事が出来る。しかも、親王は征夷大將軍に補され
給うた時

思ひきや手も觸れざりし梓弓起き臥しわが身馴れんものとは
と詠じ給うて、強き責任を感じられたのであるが、まことに、金枝玉葉の御身として、
かゝる御境遇に處し給うた事は、畏れ多い極みである。

かくて、御みづから陣頭に立つて、兵士達を激勵あそばされ、志氣を鼓舞し給うた。
「戦場に出で侍りし道すがら、勇みあるべきことなど、つはものどもに言ひ含め侍

りしついでに、思ひ續け侍りける」といふ詞書のある

君がため世のため何か惜しからん捨ててかひある命なりせば
の如き御決意を拜誦しては、何人か、國民の奮起しないものがあらう。

さうして、親王の御理想は、

四方の海のなかにもわきて静かなれわが治むべき浦の浪風

といふ、平和の克服の方へ向けられてゐた。親王は、その爲めに、長い流浪の御生活
にも挫け給はず、いな、ますます高い發展を目ざして、努力あそばされた。哀切な御
歌とともに、靜かに歌作を樂しまれる、御心のゆとりを伺ひ奉る事が出来る御作の
中に、さうした御氣概を看取申上げる事も出来るのである。まことに、詩情が實行
運動によつて觸發され、心情と行動との渾然たる融和が惹き起される範を示し給
うた事、親王の如く尊き身分の方であらせられ、又、古い時代に、溯り得る事は、まこと
に稀有である。かくてこそ、わが國風の存在意義が、明かにせられたのである。

親王は、その御晩年、畢世の文學的御業績たる新葉和歌集を撰し給うた。吉野の

朝廷の方々の風懷は、此の集によつて永久に残される事が出来たのである。さうして、此の御撰の成つた翌々年に親王は薨去あそばされた。吉野の勤皇志士の魂は、新葉和歌集によつて、常にわれわれの近き傍にある。さうして、とこしへに親王の御惠澤を仰ぎ奉り、その御恩徳に感泣してゐる事、現代のわれわれが、新葉和歌集や、その御歌集なる李花集を拜誦する場合の心持と同一であらう。

十九、北畠親房

皇族に宗良親王がましまし、臣下に北畠親房があつて、吉野の朝廷の御ため上下協力した所に、その精神的偉力が發揮せられたのである。宗良親王は歌人として藝術的方面に活動あそばされ、北畠親房は學術的方面に、すぐれた業績をあげた。此の方々によつて、吉野朝廷の文化は輝かしい光芒を放つ事が出来たのである。もとより政治、軍事の實踐に携はられて、有力な行動者であつた事は、いふまでもない。

しかも、親房にしても、その生活は窮乏簡素であり、その境遇は文化から隔絶せられた僻遠の地を流寓しつゝ、よく不撓不羈の精神と、君國を思ふ一途の熱情に満たされて、平和の時に見られない氣魄と迫力との漲る著書を世に示す事により一世の人心を鼓舞した。さうしてそれは長く、日本國民の向ふ正しい方向を示す指針ともなつた。

神皇正統記の冒頭にある「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。わが國のみ此の事あり、異朝にはその類なし。此の故に神國といふなり」といふ強い信念に満ちた、力強い斷定を、非常の時期に當り、困苦の生活を體驗しつゝ、正義の戦を乗り越えた人でなくして、果して何人かよくこれを云ふ事が出来ようか。國體の本義は、此の短い文章の中に言ひつくされてゐる。此の端的な表現をなし得るものは、多年これを思ひ、内にこれを追求する事深いものにしてはじめて可能なのである。日本を神國とする表現は、これ以前にも多くあつた事は確であるが、特に此の文章全體に籠められた意義と氣魄とを思はねばならない。

親房は、本書において、御歴代の御略歴を述べ、皇統について正しい理解を與へる事に努めるとともに、その間、武家時代となつて世の衰へた事を慨し、天皇親政の熱烈なる希望をもらしてゐるのである。即ち、此の書の史論が、親房の正しい歴史觀の上に立脚して、國家的理想を演べる立場から書かれてゐる事を知る。

かくて、後醍醐天皇については、最も多くの紙数を費して、吉野朝廷の正統なる所以を力説した。「今こそ此の天皇、疑ひなき繼體の正統に定まらせ給ひぬれ」と申上げ、「今の帝(後村上天皇)又、天照大神より以來の正統を受けましましぬれば、此の御光に争ひ奉る者やあるべき」と述べてゐる所に、親房の明かにしようとする欲する主題があり、かくて、「神皇正統の邪なるまじき理を申し述べて、素志の末をも顯はさまほしくて、強ひて記し附け侍るなり」と、著作の趣意を明確にしてゐる。それ故、武家がその功賞に封域を望む事を慨しては、「況んや日本の半ばを志し、皆が望まば帝王は何處を領らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出で面に恥る色のなきを、謀叛の始めといふべきなり」と喝破して、その政治的見解を表明してゐる。

るが如き、現代においても重要な意義を有するものである。

延元三年は、親房の子顯家、新田義貞、相續いて戦死して、吉野の朝廷に悲風烈しきものがあつたが、それにも屈せず、東國の經營に主力を注いで、顯家の弟顯信を鎮守府將軍に任じ、義良親王を奉じ、宗良親王も亦、同行せられ、親房や結城宗廣等も御供して伊勢大神宮に此の事を奉告し、海路東國へ出發したのであつた。然るに途中で暴風にあつて遭難し、一行の船は散りぢりとなつたが、幸ひ親王方を始めまつり主だつた人々は無事に漂着し、親房も亦助かつて、常陸に上陸した。かくて常陸の小田城にあつて、親房は、専ら東國の經營に従つたのであるが、その間、翌延元四年の秋に執筆したのが、此の神皇正統記であつた。従つてもとより参考にあらずべき書とてなく、たゞ「最略の皇代記」だけを頼りとして、本書を完成し、以て世の順逆に迷ふ人々に示さうとしたのである。時に親房は四十七歳であつた。一冊の書も参考とせず、此の詳細なる史書を書き上げた親房の博覽強記は驚くべきものがある。

それのみではない。親房はやはり此の小田城において、職原抄をも著した。此の書は大寶令以後の官職の制度の變化を詳細に解説したもので、親房は本書によつて吉野朝廷の職制を堅くし、その將來に具へるとともに、制度の完備に遺憾なき事を期待したのである。今日、古代の有識故實を調べようとするものにとり、本書は重要な楷梯となる典籍である。しかも、本書も亦、全く何の参考書もなく、たゞ腦中の記憶によつて、これを記してゐるのは驚嘆の他はない。

更に親房は、小田城が、敵方の手に陥つた後、關城に移り、此所で興國四年に神皇正統記を訂正してゐる。今日傳はるものは、此の興國四年の訂正本で、それ以前の、原本は未だ存在が明かでないが、延元四年に、此の書が書かれると直ぐに、多くの人の手で寫し傳へられて、世に流布した趣がうかゞはれる。本書の精神的影響は、當時早く既に現れてゐたのである。それとともに、陣中にあつて、致々として、價值高き意義ある著作につとめ、當代を益し、後代をうるほす、その薰化の偉大なるは、いよいよ敬慕するに餘りあるものを感じしめる。

二十、吉田兼好

吉田兼好は、本姓卜部氏、即ち卜部神道を以て、わが國の神道の歴史の上に太い一線を劃してゐる卜部家の人である。

卜部神道は、宗源神道とも唯一神道とも稱されて、外來思潮の影響よりも、むしろ神道思想を唯一の主體とする所に重點を置いてゐたのである。併し實際において、神佛混合思想の影響を脱する事は、當時の事情として甚だ困難ではあつたが、従來行はれてゐた兩部神道に比して、卜部神道の神道的、國家的自覺は注意されてよい事である。兼好は此の卜部家から出た人であつた。

卜部神道には、伊勢大神宮の渡會神道と交流する所があつた。此の伊勢神道の人々は、吉野時代に於ける吉野の朝廷の精神的支柱となつてゐた。それは單に精神的方面ばかりでなく、物質的、具體的な援助を惜しまなかつた。吉野の方々は幾度か伊勢を足場として、活動の源泉を此處から得てをられる。北畠親房の神皇正

統記の思想の如きも、伊勢神道を代表する渡會家行の意見の影響を受けたものである事は、既に明かたせられてゐる所である。即ち家行は、その大著類聚神祇本源を、後宇多天皇、後醍醐天皇の叡覽に供しまつり、親房もまたこれによつて、神道觀念につき、啓發せられる所が少くなかつたのである。

かくて、家行は、吉野の朝廷に參じ、勤皇家として著しい働きをした。此の渡會神道の家行とともに、卜部神道から、吉野方に加はつた神道家に釋慈遍がある。慈遍は出家の身でありながら、神道の著書を成し、卜部神道の中でも、立派な業績を示した一人であるが、兼好は、實に此の兄の弟なのであつた。

兼好も亦、その兄と同じく、神道家より出て出家したのである。北面の武士として、後宇多天皇にお仕へしてゐたが、崩御あそばされた後、世を厭うて叡山で出家した。その經歷は頗る西行を思はせるものがある。兼好の和歌を通して見た出家隱遁の思想においても、亦西行と相似たものを思はせる。

併し、兼好の思想は複雑で、西行の如く、自然を愛する點で純一なのは異つてゐ

た。兼好には、儒教や老壯思想の影響も、既に深く浸潤してゐた。吉野時代から、此の儒教思想、殊に宋儒の影響が強くなつて來る。それは、兼好の時代の複雑さが背景にある事を示すものであつた。京都市を相手にして、惡戰苦闘を續ける吉野の朝廷の方々については、それぞれ思想の鬭争、自覺、反省なども續けられた事であらう。それだけ、思想は混沌複雑なものがあるのである。

併し又、その混沌複雑なものの中に、純一の光もさし示されてゐた。兼好の複雑な思想の中には亦おのづから、此の純一の輝きを認める事が出来る。故に、此所に敢て兼好の爲めに筆を費す事としたのである。

徒然草は、近世から近代に至るまで、思想的な影響を深く及ぼしてゐる點では、有数の作品の一である。その啓蒙的な訓誡、平易で實踐的な倫理道德觀念が、經濟生活の發達した近世以後の處世術に、適當な且興趣に富む教訓を與へる結果となつたからである。しかも、さういふ一般的教養の中に、「つれづれなるまゝに」と書き起した序文的文章の直ぐ次の第一段に、「帝の御位はいとも畏し、竹の園生の末

葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき」と述べて、皇室の貴き所以を、先づ説き、一般國民と明瞭に區別申し上げてゐる所が、注意に値する。

さうして御國讓の大事が、劍・璽・内侍所(即ち御鏡)の三種の神器の遷御によつて決する事を述べた所もあつて、これらは、神皇正統記に主張しようとした所と、冥々(めいめい)のうちに通ふものがある。

更に、兼好は、「古の聖の御代の政をも忘れ民の患國のそこなはるをも知らず、萬づに清らを盡していみじと思ひ、所せき様したる人こそ、うたて思ふ所なく見ゆれ」と皮肉を云つて、勤儉質素を強調したり、殊に、唐の物は、藥の外はなくとも事缺くまじ。文どもは此の國に多く弘まりぬれば、書き寫してん。唐土船のたやすからぬ道に、無用の物どものみ取り積み、所せく渡し持て來る、いと愚かなり」と云つて、外來の事物に無用の物多く、これを排すべき必要のある事を説いてゐる所など、その言説の、なほ現代的生命を持つ所以である。

併し、兼好は、楠正行等の戰死した後、兩三年にして歿したのであつて、吉野の朝廷

の悲運の時代に生活してゐたのであつたが、徒然草その他に、此の戰雲濃き時代に處した彼の心境については全く書き残された所なく、その家集からも此處に一首も録する事が出来ないのを遺憾とする。又、高師直の爲めに艶書を代筆したといふ巷説は、信じられないとしても、兼好その人に、不徳の點あるを感ぜしめるは、否まれないのである。しかも、徒然草を通して見られる兼好の文學は、確に民族文學と稱するに値する實質を持つてゐるのである。

二十一、世阿彌元清

詩歌と小説、それに戯曲が、文學の著しい三つの形態である。わが國で、此の戯曲を、最も價值あるものに創造したのが、世阿彌元清であつた。

世阿彌が、どれほど豊富な才能の持主であつたかといふ事は、今日の謡曲において、その最もすぐれた作品は殆どすべてが世阿彌の創作にかゝるものであるといふ一事によつても明かである。一時、謡曲の詞章は、學力のある僧侶の作にかゝる

もので、無學な能役者などが作つたのではないといふ考へも行はれてゐたが、今日では、それが誤である事は明かとなつてゐる。世阿彌が自分で書き残した謡曲の本文も現存してゐるし、又謡曲の創作に關する世阿彌の意見を記した書物も見出されて、世阿彌が謡曲の作者であつた事は、疑ふべくもない。

世阿彌は能役者であつたから、自分で演じて見せた事はいふまでもない。自分で詞章を作つたものを、自分で演じるのであるから、自然、その詞章の作曲も、しぐさの振付も、世阿彌が作り出したものであるといふ事は明かである。即ち、彼は偉大なる文學者、偉大なる作曲家、偉大なる振付師、偉大なる演出家、さうして、偉大なる俳優であつた。その上、彼はすぐれた思想家であり、理論家であつた。彼は藝術に關する思索を詳細に書きとめておいた。それは、藝術理論に關して、充分現代の哲學の批判に堪へる精緻な體系を備へるものであつた。これらの點を、一人で兼備へた藝術家は、世界のどこを深しても一人もゐない。世阿彌を以てわが國の誇るべき大天才とする所以である。それは、謡曲が、わが國の誇るべき藝術である如く、世

阿彌を以て世界に誘ふに足る大藝術家であるとするのである。世阿彌の教養と學力は、確に當時の歌人學者に比して、遜色のないいなそれよりも遙に卓越した第一流のものであつた。

世阿彌は、足利義滿に愛されたが、その晩年、何の理由か不明であるが、將軍義教によつて佐渡に流罪に處せられてゐる。とにかく彼は長い間、足利將軍の保護を受けて能樂が大成したのも、彼の非凡なる天才とともに、將軍家の保護による所が多かつたのである。

かくて、世阿彌が、個人的には將軍の恩義に感じる事があるとしても、その作品の上に、將軍あるのみで至上の御事を顧みないとしたなら、その藝術は、やはり民族文學としての血統に資格が缺けてゐる事はいふまでもない。

だが、その作品を見よ。人々が謡曲を味ふなら、そこに流れてゐるものは、國民として最も大切な精神であることを痛感するであらう。

謡曲には、皇室を取扱ひ奉つた作品がしばしば見出される。しかも、それは、いづ

れも皇室尊崇の念より出てゐるものである事は明かで、賤の奴も皇室に對しまつり、心より忠誠をおつくし申上げるといふ精神が、どの作にも溢れてゐる。「國柄」の如きは、その著しき一例である。これも、世阿彌の作である。「金札」は、桓武天皇の平安奠都を祝しまつり、神々もその天下泰平に力を併せまつるといふ内容で、「それ久方の神代より、天地開けし國の起り、天の瓊矛の直なるや、名も二柱の神こゝに、八洲の國を作り置き、皇代なれや大君の御影のどけき時とかや」と云ひ、「たゞ重くせよ神と君」と歌つてゐる所など、かういふ詞章のはしはしにまで、その精神のうかゞひ知られるものがある。これ又世阿彌の作にかゝる。

世阿彌は、決して將軍をほめたゞへる事なく、公の作品においては、常に皇室を第一として、讃仰の念を明かにしてゐる。彼は此の作品を、將軍の前とともに、民衆の前でも演じて見せたのである。これによつて、多くの國民達が、國體や國民精神について、覺らしめられる所があつた事は、想像するに難くない。かういふ點は隨所に見出す事が出来るのである。

次に世阿彌の作には、わが國の優位について、宣揚したものがあつた。その著しい作は、「白樂天」である。白樂天が日本の智慧を計るために渡來するが、却つて和歌の神である住吉の明神の御爲めに、あへなく撃退せられるのであつて、「現れ出でし住吉の、住吉の神の力あらん程は、よも日本をば從へさせ給はじ。速かに浦の波立ち歸り給へ樂天」といふ結果になる。これ又世阿彌の作である。

かくて又敬神の念に富む作の多い事も、例をあげるまでもあるまい。

見來れば、謡曲に中心となる精神は、わが民族文學に一貫したものであることを知る。世阿彌は此の意味において、最も偉大なる國民文學者であつた。世阿彌の作品その精神は、現代もなほ生きてゐる。さうして、世界は、此の藝術よりさまざまの方法を學ぼうとしてゐる。世阿彌の藝術は、かくて世界第一流のものであつた。世阿彌を通じて、日本文化は世界に普遍し、世界を指導する事も出来るのである。

二十二、宗 祇

わが日本の詩に連歌といふ獨特の形式が存する。連歌は支那の詩の聯句と連關があるが併しその發生は上古にあるのであつて、日本武尊が、甲斐の酒折宮で新はり筑波を過ぎて幾夜か寝つる

と歌はれたのに對し、御火燒の老人が

かゝ並べて夜には九の夜日には十日を

と續いて歌ひ奉つたのが連歌の最初とせられ、それで和歌を敷島の道と云ふのに對し、連歌の事を筑波の道と云ひ、又連歌を集めた代表的な撰集の書名を蒐玖波集とか新撰蒐玖波集とか名づけられた。萬葉集の中にも、連歌が一首出てゐる。

かくの如くにして、古くから自然に發達して來たわが國の連歌が、支那の聯句の影響によつて、一層形式的な發達を見せたのである。

かやうに、わが國の詩歌が持つ此の特殊な形式に對して、西歐詩學の觀念からこれを否定するやうな意見も出てゐる。それが、一方から云へば、日本思想を顯示した正岡子規の主張でもあつたのだから、明治時代の混沌たる思想界の大勢は、如何

ともしがたいのであつた。

反對者は、個性の抹殺や、遊戯的であり眞實性の抑壓といふ點などから、連歌を否定しようとするのである。併し、それは西歐的な藝術觀念から見ての論であつて、連歌そのものの藝術性は、決して、さういふ意味で否定せられるべきものではない。

連歌は數人集合して、相互に協力して、これを作り上げるものである。その爲めには、その席に連なる人々の心や雰圍氣や、すべてのものが統一せられ、渾然たる境地の中に融合するのでなければ、決して連歌の傑作は出来るものではない。即ち小さい個を抑へて大きい個、共同的な個の中に生きようとするのである。

かやうな連歌の意義や精神を見來れば、個人性のみを主張する西歐的藝術觀念で律し切れるものでない事は明かであらう。

此の連歌が、藝術的に顯著な發達を見せたのは、實に連歌師宗祇の努力の賜物であつた。それとともに、室町時代の武人達が連歌を好んだのも、連歌における一如の無礙の精神が、武士的精神に通ふものを持つてゐたからである。

宗祇は、身下賤の出であつたが、連歌の發展に偉大なる貢獻をする所があつた。さうして、その撰んだ新撰菟玖波集は、勅撰集に准ぜられ、撰成つて、禁裡に奉獻した後には、御嘉納の女房奉書を賜はつてゐる。初撰集の議にあづかつた時には、宗祇はこれを一代の名譽として撰集祈念の連歌を作り

朝霞おほふや恵み筑波山

と、その喜びの情を表はした。

連歌には法樂連歌と云つて、神前に祈念の爲めこれを行ひ、その際には精神を集中し、眞心を捧げて、作つたものがある。武士の出陣の時に神前で行はれた出陣連歌の如きものもあつて、連歌が武士によつて活用せられ、その精神の喜ばれた事も少くない。和歌よりも連歌が武士によつて喜ばれたのは、作品そのものにおけるよりも、むしろ連歌の持つ氣分や精神や形式や、即ち連歌全體の中に武士生活におけるものと同脈の共通する所があつたからである。それは禪が武士によつて喜ばれたのと同じ内面的理由を持つものである。

宗祇は此の武士の間に多くの知己を持つてゐて、連歌を通して、彼等の精神的な指導者ともなつてゐた。お互に對立してゐた大名達は、連歌師を通して、武士的精神に生きる、それぞれの生活の中に、交流するものあるを見出したのである。

宗祇が生涯の大部分を旅に過した點は、遂に西行の跡を追ふものであつた。さうして、遂に旅中箱根の湯本で歿したのである。彼が病を押し、老を押し、苦しい旅を續けたのは、旅の苦しさの中に、大なる自然に觸れて、永遠の生命に悟入する喜びを味ふ事が出来たからである。信濃路の彼の吟

世にふるも更に時雨の宿りかな

は、旅の寂しさの中に、人間の生活と自然との觸れあふ所を見出した歎きを洩らした作である。

宗祇は西行の足跡を追うて、西行の足の届かぬ所までも遍歴して廻つた。さうして至る所で、自然の清麗寂寥の姿を歌つてゐる。

櫻狩かへさは野邊の草かな

露落ちて朝風匂ふ楞かな

雪ながら山本かすむ夕べかな

の如き清澄な自然觀照の句は、自然を眞實に愛する者にして、始めて可能な事である。第一の句の如きは、山部赤人の「春の野に葦摘みにと來し我ぞ」を思ひ起させる。實に自然詩人の系譜は、赤人、西行の後に宗祇を置く事によつて、わが民族文學の歴史に流れるものが明かとせられるのである。これによつて、宗祇の占める位置も亦明かに考へられるであらう。

二十三、芭蕉

世にふるは更に宗祇の宿りかな

旅を愛した芭蕉は、照りつける日光を防ぎ、雨露に濡れるのを防いでくれた愛用の笠を修理して、その笠の内に、宗祇の作に擬して、かう書きつけた。

まことに芭蕉は、宗祇の生活を思ひ、更に遡つては、西行の漂泊に、幾多の思ひを寄

せてゐたのである。西行から宗祇へと受けつがれた旅の詩人は、更に芭蕉を得て、新なる生命の血脈が見出されたのである。

旅人とわが名よばれん初時雨

芭蕉は、俳諧の創始者である。俳諧の歴史は、もとより芭蕉以前にもあつた。併し、俳諧に眞の藝術としての生命を吹き込んだのは、實に芭蕉その人であつた。俳諧は芭蕉によつて、詩としての鑑賞に堪へ、批判に堪へるものに完成せられたのである。

俳諧は連歌から發展して來たのである。連歌の墮落を救はうとして起つたのが俳諧である。さうして、宗祇は連歌の中興の祖であつたとすれば、芭蕉が眞の俳諧の祖と見なされる時、藝術に對する熱烈なる氣負が、此の時代を異にして出でた二人の詩人の間に、流れてゐる點において、共通するものがあるのは當然である。さうして、芭蕉が歌人西行に對するよりも、むしろ同じ句の道の祖として、宗祇の方により多く親しみの情を感じてゐたであらう事も亦考へられるのである。さう

いふ意味でも宗祇の血統は、芭蕉によつて正しく受け繼がれてゐた事を知るのである。

芭蕉の身體は弱かつたらしい。健康な身體を持つものでさへも、旅は苦しいものである。それを病弱な芭蕉の「そゞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず」旅へと憧憬の情を寄せるものは、肉體の苦痛を越えて、自然の靈の偉大な包容の中に、聖なる喜びが見出されたからである。

それ故、奥の細道の大旅行に出かけた芭蕉は、「長途の苦しみ身心疲れ」る一方「且は風景に魂奪はれ、懐舊に腸を斷つて」ゐるのである。さうして、遂には「持病さへ起りて、消え入るばかり」の身で「遙なる行く末をかゝえて、かかる病覺束なし」と思ひながらも、「道路に死なんん是天の命なり」と觀じる時には、「氣力聊か取り直し、路縦横に踏んで伊達の大木戸を越す」芭蕉であつた。此の精神力あるが故に、芭蕉は病に勝つて、旅を続け、七ヶ月にわたる大旅行を終つて、更に、「旅の物憂さもいまだやまざるに」伊勢大神宮の遷宮を拜まうとて

蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

の句を残し、伊勢へと旅立つ事が出来たのであつた。

奥の細道は、かつて西行も通つた道であつた。宗祇も亦その道を通つてゐる。此所に芭蕉が、此の同じ旅程の行脚を思ひ立つた事も、當然の心の動きでなければならぬ。

笈の小文で「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、その貫通するものは一なり」と喝破した芭蕉は、更にこれに「芭蕉の俳諧における」の一事を追加する事が、その生涯の事業であつた。此の一事は小なる如くであるが、今日、國民詩にまで一大發展を遂げた俳句の進歩發達を見る時、芭蕉の事業は、實は國民文學の建設の爲めに、献身の努力を捧げたものでなければならぬ。

さうして、此所にも、文學の世界においては、西行から宗祇へ、宗祇から芭蕉へと、精神の受けつがれて行つた事が感ぜられる。

芭蕉は藝術の練磨に、その生活と精神をかけた。それとともに、藝術精神の鍛練に一層の努力を集中した。「さび」と云ひ、「しをり」といふ、芭蕉の藝術精神を端的に表現した語は、芭蕉が磨きに磨き、鍛えに鍛えたその最後の根本のエキスがそれであつた。それ故、これは百億の秘義を藏するのであつて、わが國の藝術の本質は、芭蕉の到達した此の深奥な語の中に解明の鍵がひそめられてゐる。「さび」は一般に東洋藝術に普遍的な精神とも考へられるのであつて、芭蕉の藝術は、更に東洋的な普遍性の中にも深く沈潜するものがあつた。李白、杜甫を愛した芭蕉なのである。既に芭蕉の藝術は、わが日本の詩として東洋に示し、世界に普遍する價值を持つてゐたのである。

不易と流行も亦、芭蕉の到達し得た藝術上の理論であつた。さうして、芭蕉の本當の心が、一時流行よりも、千歳不易の上にあつた事は、いふまでもないが、不易の精神の上に立つ流行の姿も亦、必ずしも排してゐるのではなかつた。かくて此の兩者を認める時には、じめて時代時代の變化によつて裝はれたさまざまの現象の中

に、わが民族文學に貫通する不易の本體を芭蕉とともに、見失ふ事がないのである。旅の詩人芭蕉は、遂に大阪の旅先で病を得て、客死した。旅中に歿した宗祇の跡を、かくて芭蕉は、最後まで追つたのである。

二十四、近松門左衛門

日本の戯曲は、近松門左衛門を得て一大飛躍を遂げた。世阿彌元清によつて高められた能樂の後に、近松門左衛門が出て、操人形劇の上に劃期的な發展が見られ、現在我が國が世界に誇る人形淨瑠璃の基礎は、彼によつて、その基礎が築かれたのである。

近松の戯曲は、教養の低い民衆を對象にして作られたものである。當時、人形淨瑠璃を喜んで見物した人々は、今日の俗悪な映畫を見る人々と、殆ど同様の程度の者が多かつた。従つて、戯曲の内容も構成も、さういふ人々にわかりよく作られ、その心の中に浸み通つて行く事が必要とせられた。

併し、それにもかゝはらず、近松の作が、俗衆にこびる卑俗化を目的とせず、むしろ國民の理解を富ましめ、教養を高める用意を以て作り出されてゐる所に、彼の民衆教化の理想が見出されるのである。もとより、興味をひきつける爲めには、それに適切な種々の技巧も必要であつて、近松も十分に、そのコツを心得てゐた。それ故に、近松が歴史的な成功を贏ち得る事が出来たのであるが、併し、それは決して迎合阿諛ではなくて、その間に、近松の理想の普及がひそめられてゐたのである。

近松以前の所謂古淨瑠璃の類を讀めば、いかにその文章が低劣で、内容も支離滅裂、場當りのな場面の集合に過ぎないかが看取せられるのであるが、近松の作に至つて、文章は和漢の故事に即し、流麗な聲調のもとに朗々誦すべき美しい表現を作り上げたのは、まさに、世阿彌の作にかゝる謡曲文の美しさに匹敵するものがある。内容は、一貫した劇的發展のもとに、悲劇喜劇を織りまぜて、興味深き場面を現出しつゝ、日本國民の精神生活に最も強く深く觸れて行かうとしたのである。

近松の代表的名作として、當時も一大歡迎を受けて、三年越し十七ヶ月を連続公

演したものに「國姓爺合戦」がある。明末亡命の忠臣、鄭芝龍の遺子、和唐内が韃靼を打破り、明朝を再興する事件を取扱つたもので、此の和唐内の母を通じてその血の中に流れてゐる日本人の精神は、本作の至る所に現れてゐる。殊に和唐内の母が、一身を殺して、和唐内と敵將甘輝との融和を計り、これを味方に引き入れる犠牲的精神の發揮は、常に近松の作を通じて強調せられてゐる所で、従來の作品の興味的な取扱ひ方とは異なるのである。さうして、近松によつて作り出された此の自己犠牲の悲劇的場面は、これ以後、近松を尊崇する多くの淨瑠璃作者によつて、受けつがれて行つた所である。

赤穂義士の事件を始めて淨瑠璃に取り上げたのも近松であつて、その作「碁盤太平記」は、事件後五年にして上演せられた。忠臣蔵の内容は、近松の此の作によつて中心が作り上げられてゐる。それは、多く世人の耳目を衝動した社會的事件を、舞臺に上す事によつて、觀衆の興味をひかうとするやうな功利的目的ばかりからこれを取り上げたのではなく、それを通じて、當代の事件に對する批判の方向を與へ、

正しく民心を導かうとする、近松の精神より出てゐるのである。それ故、碁盤太平記には、「四十七人の忠義の武士と末代に名を止むべし」と斷じた事件を、此の趣旨のもとに取扱ひ、「國姓爺合戦」では、「かゝる勇者の出生する國國たり君君たる日本の麒麟是なるわと、異國に武徳を照しけり」といふ日本の勇武を觀衆に自覺させようとしたのである。

近松の作をつらぬく道義的精神は、確に民衆教化の上に功があつた。併し又、彼は人情の強調と、美しい情愛の發露とを忘れなかつた。此の事が、彼の作品に、心中事件を多く取扱はしめる原因であつた。社會的桎梏のもとに、個人的愛情の脆く敗北する結果を描いたのが、その心中物である。道義的精神によつて、再びこれを生かし、社會的使命感のもとに、力強い生命を、これに與へる事をしなかつた。これは近松の一つの缺點でもあらう。個人的愛情を、社會的的生命の中に生かす方法は、彼は教へなかつた。併し、當時の社會は、武士的封建制度が根強く、未だ此の間の關係を調整する事が出来るほどに、時代は進んでゐなかつたのである。

個人的愛情は、中世には未だ低い民衆層の中には現れてゐなかつた。それは中世的封建制度のもとに押へられて、發芽する餘裕もなかつた。所が此の時代に入つて、漸く、これが町人平民達の間にも自覺せられて來たのであるが、しかも當時の社會的通念のもとに、脆くも壓伏せられて行つた。その過程を示したのが即ち心中物なのである。さうして、さういふ敗退から救はれる道を示してゐないのは、心中を以て人情美の極致の如く思はしめる誤解を招いた。たゞいかなる場合にも、清純なる心情を以て覺悟を定め、平靜に死につくが、日本人の常とする所なるは、近松のそれらの作にも明かに描かうとせられてゐた所である。

近松は少時寺の小僧をしてゐて、佛教的教養があり、又豊かな儒教的教養をも備へてゐたので、百王思想の影響を受けた所がある。「姫山姥」に「我が神國の天叢雲、百王護國の法守。偃す民こそ目出度けれ、されば今上天曆の帝御代知ろしめす慈愛」或は「日本振袖始」に「天照大神の御孫、天津彦火瓊々杵尊と申すこそ代々に君たる始なれ。久方の日の神の御影映りし八咫の鏡、是を見る事吾を見るが如くせよとの

神勅にて、民恤みの仁の道、百王の後迄も内侍所と崇めらるゝと叙べてゐる所などがそれであるが、しかも、これらの文章が、わが國の國體や歴史の正しい觀念を、當時の低い民衆層に植ゑつけるのに効果があつた事を想像する時、それは百王思想の觀念を相殺して餘りがあると思ふのである。此の百王とはたゞ數の多い事を意味してゐるのみで、近松のそれには、慈鎮におけるほどの根強いものが認められない。

二十五、井原西鶴

西鶴は淫蕩的な頹廢作家に過ぎないであらうか。恐らくさういふ解釋は、西鶴の全作品に通じない所から出たものであるに相違ない。なるほど、西鶴は、さういふ題材についても數多の作品を書いたが、併し、それが西鶴の作品のすべてではない。のみならず、西鶴は、さうした作品においても、これを積極的で、勃興的氣勢の強い當時の町人達の旺盛な生活意識のもとに、發展的態度で書いてゐる。たとへば一代男の主人公世之介は、日本の女性を征服しつくしたといふので、一隻の船を仕

立てて海外探險に向ふ所で物語りは終つてゐる。探險の目的物は、怪しげなものであるが、これを元祿時代の町人階級の豪勢な經濟生活から生じた、海外發展の理想それは公には禁止せられてゐたの、一つの變型だとして考へれば、西鶴の積極的な意圖は諒解出来るはずである。それは必ずしも頹廢的だとして貶す事からはなく、それとは對蹠的な精神であると思ふ。

勿論、かういふ辯護は、又決して西鶴のすべてにあてはまる事ではない。西鶴には、時流に投じようとする心持の働いてゐた事も否定出来ないであつて、それがかういふ作品を作らせる一つの有力な原因であつたらうが、併しそこに又、西鶴の作品を通じて、時代の積極的發展的氣慨の認められるものがある事も、注意しておきたいのである。

西鶴は、さういふ作品のほかになほ多くの他の方面の作品を書いてゐる。就中町人の經濟生活を描いた、所謂町人物では、當時の町人の或は興隆し、或は没落するさまを描いて、人生の眞相に迫るものがある。或は、武士階級の道義的精神を種々

の角度から描いて、しかも、此の武士的精神を、西鶴は決して擲揄せず、むしろそれに讃嘆の辭を捧げてゐる事が看取せられる。

西鶴の辛辣な皮肉は、町人達の好色の、又經濟的生活に對しては、隨所にこれを見出すことが出来るのであるが、武士的精神生活に向つては、その態度が異なるのである。それだけに、武家物は、西鶴的特色を失つた所があるが、併し、それは西鶴が武士階級を憚つて、さういふ態度に出たのでは決してない。又、不敵な西鶴は、さういふ事をする人間でもないのである。武士階級に對する、さういふ態度の中に、西鶴の精神の動きを見出すことが出来る。西鶴は、確に、道義的精神に向つては、日本人らしい尊敬の情を失はなかつたのであり、さういふ道義的生活を守る武士に對して、これを尊敬するに吝かではなかつた。

それに反して、町人達の成金の生活は、西鶴にとつて堪へ忍ぶべからざるものがあつたので、辛辣にこれを擲揄するに假借する所がなかつた。例へば古下駄の片方までも惜しむやうな、町人のあまりに吝嗇に過ぎる有様を誇張して描き、そこに

諷刺的表出を取つた所の多く見える點などが、それである。

もとより、さうはいつても、西鶴の作品に、物質的、即物的要素が多くて、精神的理想的要素に乏しい事は、その短所としてあげられなければならぬ。それ故、西鶴の作品に比して、著しく詩的精神の昂揚してゐる芭蕉や、又、人情的精神に富む近松の作が、これらの長所あるが故に、西鶴の作品以上の氣品を以て、その上に置かれるべき理由がある。併し、西鶴の残した巨大な足跡を認める時、わが民族文學の歴史から、これを排斥し、抹殺すべき理由はないのである。わが國民の昂揚する精神生活は、確に西鶴の作品を通じて、現代の科學的精神の上にもつながるものあるを、われわれは否定する事が出来ない。

西鶴は、平安時代の古典作品を新しく元祿文學の中に生かしたのであつて、伊勢物語や源氏物語は、更に現代的生命を得て、元祿時代に出現してゐる。日本の精神生活の一の様式は、西鶴を通じて、時代の装ひを着ながら、一貫したその著しい實在を示してゐる。

西鶴が國家に對する態度の端的に現れてゐる著に、「目玉鉾」がある。此の書は千島の果から九州壹岐對馬に至るまでの名所案内である。その初に、夷千島の前に「日の出の濱」といふ日本を象徴する名を出し、「我國は天照神の末なれば、日の本としも云にぞありける」と記し、又「天つ空替らす照す日の本の國靜かなる御代ぞかしこき」といふ歌を掲げて、わが國家に對する彼の認識を示してゐるのである。さうして本書では、江戸城などは、他の名所と同様に掲げて説明を加へてゐるのであるが、京都は全く省いてゐる。本書は大阪で刊行された書であるが、大阪の名所は、他の場所と同様にこれを出してゐるのに、京都を除いたのは、全く御所に觸れる事を憚つたがためと思はれ、即ち御所を他の名所と同様の名所視する事なく、そこに尊崇の念を明かにしてゐるのであつて、西鶴の精神の一端が此所に見得る。

西鶴は小説家であるよりも、本來は俳人であつた。俳諧師としては、芭蕉の高雅なるには及ばないが、實力豊かな作家であつた事は、一日に二萬餘句の速吟を、住吉社頭で敢へてしたといふ事實が物語つてゐる。その句集は澤山世に出てゐるが、大

句數の中には

さあ旗薄あぐる宮方

吉野山色々分別めぐらして

の如き作品があつて、吉野を宮方として、特殊の關心を示した句などが見える。さういふ意味でも、私は彼を民族文學の歴史につらなる精銳なる一人として認めたいと思ふのである。

二十六、契 冲

國學は下河邊長流、釋契冲の二人によつて、その源流が開かれた。殊に契冲の功績は偉大なものがある。又、此の二人は、水戸學の勃興に關係を持つてゐて、水戸光圀から、大いに研究上の援助を受けてゐる。國學の興隆が、水戸學の基礎を置かれた時期に密接な關係があるといふ事は、偶然ではない。兩者の精神的交流において、相共通するものがあるからである。

光圀は古典精神の闡明に志して修史の業を進める傍、萬葉集の研究に心を向けたが、未だ古典の學問の一向進歩してゐない當時において、その人を求めるのに行きつまつた。此所に、萬葉集に造詣の深い世評を聞いて、光圀は、長流を招かうとしたのであるが、隱逸の性の深い長流は遂にこれに従はず、代りに、その友人にして、二十六歳年下の契沖を光圀に推舉した。かくて、契沖は光圀の委囑のもとに、萬葉集の註釋を完成する事になつた。

はじめ光圀は、契沖を水戸に招かうとしたのであるが、契沖はこれを斷つて、浪華において、ひたすら研究に従事した。併しその間、種々の研究材料、參考資料について、光圀より豊かな援助を得る事が出来、その業を進める上に、多大の便宜を受けたのであつた。又、水戸有數の學者である安藤年山は、わざわざ浪華に來たつて契沖につき、その教へを受けたのであつて、契沖の學統は、遙かに水戸にも傳へられる事となつたのである。

契沖の萬葉集の註解が成つて、最初これを光圀に献じた時、光圀は十分それに満

足しなかつた。さうして、更に、より以上の完備したものを要求し、内容の更改を命じたのである。契沖は、これより一層の勉勵を以て、研究を進め、遂に萬葉集全部の註解を完成した。これが萬葉代匠記である。

従つて、萬葉代匠記には二種の書があるわけである。これを初稿本、精撰本と云つてゐる。前者は直觀的な解釋や鑑賞においてすぐれたものがあるが、後者は考證と研究資料の豊富精緻なるにおいてまさつてゐる。いづれにしても、契沖が、十年の歳月を費して浩瀚な萬葉集全部の註釋を、しかも二種も完成してゐるといふ事は驚くべき努力である。萬葉集全部の註釋は、契沖によつて始めて出現した。それ以前にも萬葉集の研究は種々出てゐて、就中、鎌倉時代の仙覺の如きは、萬葉集研究の上に偉大な貢獻をなした學者であるが、仙覺の註釋は集中の歌の選擇に過ぎなかつた。契沖によつて、萬葉集は、初めてその全貌をわれわれの前に出現せしめるに至つたのである。

此の偉大な二人の萬葉學者が、いづれも僧侶であつた事は、偶然と云ひながら、興

味の深い現象である。僧侶は、内典は勿論、種々の外典にも通じ、又、その同じ宗教思想から、神道に入ることにも出来たのであつて、上古の文學を研究するには、最も適當した教養を備へてゐるのであつた。それで、日本的な學問の未だ起らない當時にあつては、僧侶によつて此の學問が開拓せられて來た。

それに僧侶は又、音韻の學にも通じてゐたのは、佛典の研究上、梵語の知識を必要とし、又、支那の言語の音韻をも知る必要があつたからである。これが、専ら漢字を用ひて國語を表現した上古の古典を解明するのに重要な素養となつたのである。かくて、契沖は、上古の假名遣について、明かにし、今日まで行はれてゐる歴史假名遣の基礎は、契沖によつて築かれた。契沖は、歴史假名遣の發見者である。

文學の歴史の上で忘れてはならない事は、墮眠に陥つてゐた當時の歌界に對し、下河邊長流が、新しく歌の領域を擴張しようとして、一部の人々の歌を獨專しようとする傾向に反對の宣言をした事と、その新しい和歌の發展する根據づけに、萬葉集の價値を改めて認識しようとした長流、契沖の達見と努力とである。萬葉歌風

は、これを源流として發展して行くとともに、古代精神の復活と結びつき、上古の國家精神、國體觀念の發達が、此の線に添うて、偉大なる維新に向ひ進み行くのである。これが即ち、國學である。國學の進歩は、此の時代の新しい和歌の展開と表裏の關係にあつた。

此の意味で、契沖の業績は、和歌史の上で、又、廣く云へば、一般文化史の上で、忘るべからざる民族精神の礎石を——それも最も巨大なる礎石を置いたものであつた。それとともに、芭蕉や西鶴や近松とともに、時代を同じくして此のすぐれた大學者を出した、元祿時代の、創造的、積極的な時代精神の發展性をも思はざるを得ないのである。

二十七、賀茂眞淵

契沖に私淑した荷田春滿の門から賀茂眞淵が出た。神職の出で、濱松の本陣宿の養子となり、後志を立てて、京都に遊學し、春滿に従つた。眞淵は晩學であつたが、

その向學の心を獎勵して留守をあづかり、眞淵を勉學に出だし立てた妻女の内助の功は、眞淵の生涯を考へる上に、ひいては國學の發展について、忘れる事の出來ないものがある。

契沖の業績の中には、國學の基礎となり、萌芽と見られるもの、あらゆる要素が含まれてゐる。さうして、契沖は冷靜に學術的にその根元を固める事を怠らなかつたが、書齋的な性質を持つてゐる事は、やむを得なかつた。又、それ故に國學の發展に力強い地固めが出來たのであつて、初めは先づ靜かに念入りに、併し固く強く設計を、又基礎工事を施設する必要がある。そこから、實行上の實力が醸されて來る。

國學の第二陣を承はつた荷田春滿に至つて、初めて契沖の書齋的研究を實行に移さうとした。併し未だその時期も熟さず、實力も亦必ずしもこれに伴はなかつた。春滿の創學校啓は、漢學の昌平塾等に對し、皇國學の學校を建設しようといふ發展的熱情を以て、その企劃を當局に陳情しようとしたものであるが、遂にそれは

失敗に終つた。此の文章の刊本の中に、初めて國學といふ文字が使はれてゐる。此の春滿の計劃を、變つた形で遂に實現するに至つたのが、實に賀茂眞淵であつた。眞淵は、書齋的な契沖と、實行に走せて時期を得なかつた春滿の二人の後を受けて、此の二人の先覺者の特色を、最も一身に具備し、體得する事の出來た人であつた。しかも晩學であつただけに、身心の最も圓熟した時期において、斯學の發展の爲めに一大努力を揮ひ、よくその中樞となり得たのである。

眞淵の偉業は、契沖によつて學術的な基礎を得た上代精神、原始日本の純粹なる精神を、自己の生活の中に生かさうとした、その自覺的發展に存するのである。契沖においては、それは恐らく、研究の對象たるに過ぎなかつたのであらう。所が眞淵に至つては、最早それは、生活の信條のすべてであつた。内面生活は勿論、外面生活においても、純朴簡素な上代のそれを身みづから體驗しようとしたのである。

此の上代精神の生活化は、勢ひ尙古思想の追求に情熱を打ち込む事となつた。さうして、その和歌の作品は、さういふ生活の反映として、上代的なものを現代に再

現しつゝあつたのである。たゞ眞淵は單なる尙古主義者として、その模倣追隨には終らなかつた。眞淵は上代の純日本思想の中に、自己の生命の貫通するものあるを覺るとともに、そこに自己の個性を生かす道も知つてゐたのである。従つて眞淵の作品は、上代精神を現代に生かして、その時代の人々の心に訴へる所あらんとしたが爲めに、多大の感銘を與へて、多くの共鳴者を得たのである。

眞淵の門下が空前の多數と、且實力を備へた者を收容してゐるのは、此の眞淵の精神が當代に強く訴へる所が多かつた爲めであるが、同時に、この眞淵の門下が、或は萬葉主義、或は新古今主義、或は江戸派と稱する一派等、種々の傾向に分れて、それぞれ旗幟を高く掲げたのは、眞淵が、上代の精神は、人間の天然自然の性に任せてこれを撓める所のない、自由な自然主義にあると理解した所より生じてゐるのである。まことに、主義を高く掲げ、口頭の議論によつて思想を決着せしめようとするのは、外國の風であらう。眞淵はこれを嫌つて、たゞ自ら生活體驗の中に、純粹の日本精神を見つめようとしたのである。

かくて眞淵の理想はいよいよ高く、遂に萬葉の歌のみでは満足せず、なほ記紀の歌謡に遡つて、これを自己の作歌の理想とするに至つたが、此の傾向を示して間もなく、眞淵は此の世を去つたのである。

眞淵は、ひとり上代の古典のみならず、萬葉調の歌人、源實朝を發見して、その價値を世に紹介した。又、古事記を研究して、その眞髓を世に示さうと望んだが、齡残り少く、なし難きを覺つて、此の業を本居宣長に託し、遂に大著「古事記傳」を完成せしめるに至つた動機も亦、眞淵の慇懃にあつた。かくて、眞淵は古人を起し、後人を引いて、自己の精神を前後に流通せしめ、そこに國學の大道が完成せられたのである。眞淵が國學の意見を見るべきものに國意考がある。小著であるが、多くの示唆を與へる内容が凝縮含有せられてゐる。その中に曰く、「この國は、天地の心のまにまに治め給ひて、さる小さき理りめきたる事のなき國であり、凡世の中は、荒山荒野の有が、自ら道の出来るが如く、こゝも自ら神代の道のひろごりて、自ら國につけたる道の榮えば、すめらみかどいよいよ榮えまさん」といふのが、わが國の本然のす

がたを云ひあてた眞淵の達見で、これ實にその中心思想であつた。自然のままの神ながらの道が、かくて自覺されて来る。

二十八、本居宣長

寛政二年十一月、遷曆の齡に達した本居宣長は、滅多に旅行に出た事のない人であつたが、新造の内裡に、光格天皇の遷幸あそばされるのを拜する爲め、伊勢の松坂から都に旅立つた。出立の日は、一日中空が曇つて晴れなかつたので、人々がその事をかこつのを聞いて、宣長は

曇るとてかこつもあやなふりはへて行幸見に行く冬の旅路を
とさとし、勇んで上京の旅路についた。遷幸の儀は十一月二十二日に行はれた。これを拜觀した宣長の感激がいかに大きかつたかは、一篇長大の長歌を賦して、壯嚴華麗の行幸の御有様を描き、反歌において
いや高にみつの新宮しきそめて御代は榮えむ萬代までに

と壽ぐとともに、翌二十三日洛東雙林寺で歌會が催された時、寄日祝の題によつて

とことはに世を天てらす日の本の國の榮えぞ限り知られぬ

と雄大な調をなしたのは、前日の感激の情が宣長を驅つて、日本の永遠の相に、深く思ひを至らしめたからである。新宮造營、天皇行幸の現實と、國家無窮の信念とは、密接なつながりを持つて宣長の心を動かしたのである。此の現象は、偉大なる先覺宣長翁とともに、現在のわれわれ國民にも亦、同一の體驗のもとにあるものでなければならぬ。

あたかも、同じ寛政二年の八月に、かの有名な

しきしまの大和心を人間はば朝日に匂ふ山櫻花

を詠じて、宣長は自畫像の上に自讃してゐるのである。

賀茂眞淵が、あれほど思ひを上代に馳せ、心を國家の事にひそませたにかゝはらず、その家集を検する時、その中には、眞淵の理想を直接に打ち出したものを、殆ど見出す事が出来ないのに、一種の矛盾を感じるのである。併し、これもよく考へて見

る。契沖によつて、國學の理論的基礎が置かれ、春滿、眞淵によつて、それが生活の方に近づけられたけれども、未だ國學の精神が、内面外面のすべての生活に融合し、徹底した現實生活の行動化となる所までには至らなかつたのである。

従つて、眞淵による國學の生活化といふことは、未だ精神的な部面にとどまつてゐた。田安侯徳川宗武に仕へてゐた眞淵は、國學を行動化する事とは、未だ縁の遠い所にあつた。宣長に至つて、それは徐々に現實生活において行爲的に具體化される方向へと進んで行つたのである。かくて、新宮遷幸の行幸を拜觀する爲めにわざわざ上京して、國家の永遠を讚美する情を、直接にその聲を高らかに打上げて表出するやうにもなる。上代的な和歌の理念は、これをしきりに説いた眞淵によるよりも、むしろ歌學上の意見では眞淵と反對の立場にあつた宣長によつて實現せられたかの感がある。國學を契機とする民族の傳統感情の興隆は、かくして眞淵より宣長に至り、一層高め深められた事がわかる。これは國學の一層の進歩發展を意味するものであつた。

寛政二年は、なほ宣長に取つても、わが文化史の上にとつても、記念すべき年であつた。それは、宣長が寶曆十三年、三十四歳の時、眞淵の門に入つて、師から古事記研究の必要とその成功を勸奨せられ、翌明和元年、三十五歳にしてはじめて古事記の詳しい註釋に志した研究の成果は、その後二十七年にして、漸く此の寛政二年から古事記傳となつて現れ、その刊行が開始せられて、巨大なる姿を社會に示すに至つたが故である。

しかも古事記傳の全部の原稿が完成したのはその後八年、寛政十年であつて、宣長は時に六十九歳、着手以來まさに三十五年を閲してゐた。此の故に、寛政はわが精神文化の歴史上に記憶せられるべき年であり、偉大なる民族文學の誕生は、此所に見事な、且卓越した結實を得た。かくして、民族文學の始原に立ち返つて、新しく出發すべき方向の指針を得る事が出來た。此の精神的支柱に依據して、これが改めて行動に移される時、神道へ、古道へ、皇道へ、親政への理想となつて展開されるのである。國學は宣長によつて、一層行動的方向へ歩を進めた。

古事記傳は、科學的研究と、宣長の理論の展開とにおいて、最もすぐれた學術的成果を作り出してゐるのであるが、しかもそれは單に書齋的な机上論に終らずして、國家の發展に對する實踐的熱情を十分に含めて、その研究が進められてゐるが故に、すべての讀者は、わが國家の生成發展する實體を體得して、國民生活の實踐的根據をそこから大いに得ることが出来るのである。かくて、古事記傳卷一に、眞淵の國意考の意義を一層敷衍徹底させて、國學精神を闡明にした名著「直毘靈」を附した、宣長の眞意が明確に把握せられなければならない。

さうして、天津日嗣の高御座は、天地のむた、常盤にかきはに動く世なきぞ、此の道の靈く奇く、異國の萬づの道にすぐれて、正しく高き貴き微なりける」と喝破した宣長の精神は、上の件すべて己が私の心もて云ふにあらず、盡く古典による所あることにあればよく見む人疑はじ」といふ、古事記の研究より得た信念によつて發揮せられたものであり、精到なる研究は、遂に此の信念に到達すべき事を教へてゐるのである。

宣長が、直接にその思想を和歌の形式で發表したものに、玉銚百首がある。これは國體と神道との神髓を最も端的に表出したものであるから、次にその内容につき聊か考察を加へて、宣長の持つ思想史上の段階に觸れて見たいと思ふ。

宣長は先づ

百八十と國はあれども日の木のこれの倭にます國はあらず

と、國家に寄せる無限の思慕の情を強調し、

物みなはかはり行けどもあきつ神わが大君の御代はとこしへ

といふ永遠の信念の中に、國體の精華を、早く見出してゐるのである。さうして、これらの國家觀念を養ひ得たのは、全く古典研究の賜物であつて、

神の代の事らことごと傳へ來てしるせる御書見ればたふとしとも教へ覺してゐる。

此の國家に對する理解から、彼の詠史の歌は、自然順逆の大義を明かにして、そこに批判の基準を求めたことはいふまでもない。

隱岐の鳥弓矢圍みていまし、御心思へば涙し流る

と 後鳥羽上皇の御上を思ひやり奉つては悲痛の情を歌ひ、

大君をなやめまつりし狂夫らが民育くみて世をあざむきし

と北條氏の功罪に關し、その罪過を斷じてゐる。併しながら、かやうに歴史を見て來て、江戸幕府の時代に至る時、宣長も亦やはり、徳川家康を東照神君として仰ぎほめる作三首を詠じてやむの態度を示してゐるのであつて、それは、あづまてる御神たふとし天皇をいつきまつらす御いさを見れば」といふ所に、その根據を置いたのであつた。國學においても、時代の思想的限界は、かゝる點にも認められるのであつて、そこから次第に時代の壓迫は、行動的志士の思想を急激に押し進めて行く必要が生じて來たのである。

宣長の時代と、幕末維新時代との差は、此の幕府に對する態度において、その國學的思想を生かすか、ただ知識として持つてゐるかだけの相違點にかかつてゐた。此の事はなほ、下の志士の間の國家的認識についても同様に云はれる所があるの

であつて、宣長の時代の位置、立場にとどまつてゐるものもあれば、それから多くの飛躍をとげて進歩した思想に生きたものもあるのである。そこに、同じ志士的行動についても、なほ自覺の程度において差等の附せられるものがあつた事を注意しておきたい。

二十九、上田秋成

われわれは、此所に一個の現實論者として、上田秋成を捉へ來たつて狙上に置く。秋成は「呵刈葭」の中で論じて云ふ。「事物みな自然に従ひて運轉するを、其の勢ひに對へ立ちて止むべきにあらず。擬古は學びて得べし、復古は學者の贅言なり。然れども天地の無窮なる間は、自然の運轉にて古に復る時も有るまじきにあらず。釋氏の一劫は智術の巧なれば従ひがたく、今日の弊風うれたしとて、一民の努力にはいかむともすべからず。吾師いへらく、往時は往時にして宜しく、今世は今世にて宜しと。此言旨味あるかな」これが秋成の思想の根本であつた。さうして、秋成は

すべてを此の立場から論じた。たとへば、歴史假名遣に賛成せずして、秋成は、發音假名遣を肯定するが如くであつた。少くとも、彼は、別に假名遣の法則を必要とせず、次第に言語の變化して來たあとを理解して、現在の言語に従へば、それでよいとし、假字は言語を聞くがまゝに書して、其の假字のまゝに讀むぞ本なる」と斷じてゐる。即ち、彼は假名遣の本義を發音に従ふにありとした。古代人も假名遣を發音のまゝで書いてゐるのであるから、現代の人も、同じ理屈で、現代の發音のまゝで書いてもよいといふ事になるのである。

秋成の此の立場は、主として、復古主義者、殊に本居宣長に對して固執せられた所で、その態度は、事ごとに、宣長に反對するものを示したのである。「呵刈菝」は本居宣長との論争の書で、藤貞幹の「衝口發」といふ書が、わが國家を論じるに、儒意漢意を以てしたといふので、宣長は、これに對する攻撃の書、紺狂人を著はした。これを讀んだ秋成は、むしろ貞幹の説に賛成する所があるとして、宣長を論難したのに對し、更に宣長が辯駁をしたのが、此の「呵刈菝」の前篇である。又、その後篇は、宣長の、上古に

んといふ發音がないといふ意見に對し、秋成はその存在を主張し、宣長又これに反駁を加へた論争である。

「安安言」で秋成が、然るに、近世皇邦の學道大いに開け、復古の業を興立し、唯一（神道）兩部神道の古學ならぬを排斥し、幽を探り玄に釣る士、都鄙に競ひて出づ。其の言最も可聽者多し。于時一老學有りて、稗田口碑の古事記を撃出、日本紀を推排き、一家を興立爲んとすと云つてゐるのも、主として宣長に當つてゐるのであり、膽大小心録に至つては、或人云ふ、強ひて知れぬ事を知らんとするは、かへりて無識なりとぞ。是は聞えたと思ふて、知らぬ事に私は加へぬ也。又此の古言を強ひて説く人あり。門人を教の子と云ひて、廣く來たるを集められし人あり。やはり此の人も私の意多かりし也。伊勢の國の人也。古事記を宗として、太古を徳とせられしとぞ。翁口あしくして

ひが言を言ふてなりとも弟子ほしや古事記傳兵衛と人はいふとも
と痛烈な言をなしてゐる。

秋成は性狷介であつた。不羈にして人に下らずとせられた。いかにも彼の性格が圓滿でなく、又その境遇が不遇で、世を白眼視してゐた傾向は、明かに知る事が出来る。併しそればかりでなく、彼の思想の根據も亦、日本の進歩の爲めに、偏寄した古學派に對立する立場に置かれざるを得なかつたのである。

此所で、宣長の意見に矛盾のあつた事を指摘しておく必要がある。宣長は、歌學の上の意見では、師眞淵に反對した態度を取つた。それは、眞淵が復古主義の立場から萬葉第一主義を主張するのに對し、文化は常に變化し進歩するものであると云ふ思想から、宣長はむしろ後代の作風をあげて、萬葉古今、新古今と發展して來た歴史的根據によつて、新古今調が和歌として最も進歩したものである事を主張し、更に、それよりも後の歌人である頼阿などに傾倒してゐるのである。

「詠歌の風體古今の變化を考へて、風體の至美歌道の隆盛全備せること、新古今にきはまることをさとれるゆへ也」(あしわけをぶね)といふのが宣長の和歌に對する根本的な考で、同じ理由から、宣長は、やはり新古今主義であつた荷田在滿、荷田春

滿の甥の國歌八論の意見にも賛成の意を表する所が多かつた。しかも、やはり古學的立場から、上代の和歌や萬葉集の優越性をも認めてゐる事は勿論であるが、現代の作歌としては、新古今集を最もすぐれた軌範として仰ぐに足るといふ考へ方が、どうしても動かす事の出來ない主張の基底をなしてゐたのである。

かういふ理論を持つ宣長が、一たび和歌以外の言語學、宗教、哲學的理念などを説く方面になると、それは全く眞淵と同一の態度に立ち返るのであつて、その間、根本的な思想の統一性の上に、聊か闕けるものがありはしないかを疑はしめる。

なほ又、宣長の見解は、和歌を表現技巧によつて人を動かすものであると解釋する所から、最も華麗な表現技術に巧みである新古今集を推稱する結果にもなつたのであつて、眞淵が純粹に精神的立場から萬葉主義を主張するのと異なり、和歌における、心魂の内面的な威力といふものは、遂に外面的表出ほどの重點を持たないものとしてゐるのである。此の點も亦、心を重んじ、精神的立場を主張する古學派としては、その一般的態度に矛盾する所があると思はれる。

かうした點において徹底的態度を取つたのが秋成であつて、彼は宣長の歌學上の意見を、他のすべての學問、宗教、藝術の方面にも認めようとしたのである。眞淵が復古的立場において徹底してゐたとしたなら、秋成の現實論は、それと反對の側において徹底してゐた。宣長の意見には、むしろその兩者の間にまたがつて徹底しきれない矛盾があつたのである。従つて、秋成の論は、眞淵の態度と反對の側にある立場から、わが民族の發展的理想を擴充する一つの根本方針を指摘したものと云つてよい。

秋成は、論敵宣長と同じく櫻を愛して、櫻の歌を好んで詠んだ。又、楠公の詠の如きもあつて、彼は楠公に心服した。しかも、その底には彼一流の批判の眼が光つてゐる。それが爲め、時としては、過去の歴史に對し忌憚なき言辭をも弄する事になる。雨月物語の白峰や春雨物語の中にこれが見られる。併し、彼はわが國の文學の間に流れてゐる民族的性格の特徴の一とも云ふべき隱逸的風格を一方では示して、冷靜に廣い視野から、わが國の文化をも考へようとしてゐたものである。茶

道にも造詣の深い秋成であつた。

神ながらえらび定めて國土をたひらの都今盛りなり(皇都)

三十、燕

村

上古の神話には、神が蛇と化して、女性と婚した話が種々に見える。或は、女性が蛇身であつたといふ傳説もあつて、此の系統は後の世の道成寺傳説にもつながれてゐる。或は又、生れ出でた子が蛇身であつたといふ話もある。古事記や日本書紀や風土記に、その類の傳説を數々見出す事が出来る。

平安時代には、狐が女に化して結婚した話が傳へられてゐる。その子は大變な強力であつたといふが、此の系統は、又後世の葛の葉傳説となつてゐるのである。陰陽師の阿倍晴明の母は狐であつたと云ふ。

これらの話は、怪異に對する恐怖の情と、人間的な親しさの情とが渾和されてゐて、妖しい幻想の世界に導くとともに、又、一種の郷愁の感をも與へてくれるのであ

る。わが國には、かうして、動物を畏敬と親和の情を以て受け入れる心持が、國民感情の中に養はれ融け込んでゐた。

四國にだけあるといふ犬神つきの家、或は飯綱狐をはじめ狐遣ひの話、それから、童話にしばしば現れて来る狐の嫁入。さういふわが民族に著しい動物との接近は、なほ現代の科學文明においても破られることはない。佛教は、動物をも人間の生れかほりかも知れぬとして、慈悲を垂れることを教へたが、わが國では昔から、もつと親しく動物をも肉親のごとく取り扱つてゐる。

かうした妖異譚、就中動物の靈怪談は、われわれを少年時代の夢にかへらせてくれるのである。神祕な詩情を、そこに味ふことが出来るのは、わが民族の間に流れてゐる浪漫的な性情によるところが多いのであらう。現代の外國的知性は、此のなつかしい夢をも破らうとしてゐる。

江戸時代の天明時代と云はれる一つの文學興隆期には、此の民族的な血潮として流れてゐる怪異談を、文學の好個の題材として取り上げて、そこに豊かな空想的

情趣を湛へることに成功した、すぐれた作家を出してゐる。上田秋成がその代表者の一人であつた。秋成の雨月物語は靈怪談を小説の形で取り扱つて最高の域に達してゐる。その中には「蛇性の淫」の如き上古からの流を引く物語もある。

もう一人、詩の世界で、これを生かしたのが、秋成と交友關係のある蕪村であつた。蕪村の俳句は、單なる寫實、寫生の句として鑑賞せられるのは十分ではない。蕪村の價値は、あらゆる現實の奥底に民族的な郷愁の、そんなでゐる祕密の發見にあつたのである。

たとへば有名な、春風馬堤曲、數入の女の歸省を題材とした、この一連の詩は、故郷の美しさを、極めてロマンチックに寫し出してあますところがない。そこには、懐郷の哀愁を、ほのぼのと今の都會人にも感じさせるのである。

むかししきりに思ふ慈母の情

戸に倚る白髮の人弟を抱き我を待つ春又春

これは日本人だけに知られる感情である。

その蕪村は又怪異を俳句で取り扱つて他に見ない獨特の詩境を醸し出した

公達に狐化けたり春の月

春の夜や狐の誘ふ上童

石を打つ狐守る夜のきぬた哉

戸を叩く狸と秋を惜しみけり

かうした取材は、蕪村の好む所さうして現代のわれわれの感情にも何か觸れ所がある。

蕪村の著新華摘には、狸狐の怪異談が種々記されてゐる。その中で、かういふことを彼は物語つた。結城に假寓してゐた頃、毎夜夜ふけに雨戸をどしどし叩くものがあつて眼をさまされ、起きて外に出ると、誰もゐなくて困らされること五日に及び、蕪村も、もうそこに居ることがほとゝいやになつて來た。ところがその五日目の翌朝、村人が古狸をうちとつたといふ話をきいたが、それから此の煩ひがなくなつて、安眠することが出來た。併し蕪村は、此のいたづら狸に對して、憎しとこ

そ思へ、此のほど旅のわび寢のさびしさをとひよりたる、かれが心のいとあはれに、かりそめならぬ契りにやなど打敷かる」と同情を寄せてゐるのである。

かういふ狐や狸の句ばかりではない、

雲を呑みて花を吐くなる吉野山

閻王の口や牡丹を吐かんとす

の如き表現にも、やはり一種の妖怪趣味を感じさせるものがあるであらう。それから鬼や河童が出で、殊に狂女も亦、蕪村の好んで詠んだ對象である。狂女はやはり人事としては異常な存在で、狂女文學ともいふべきものが、謡曲以來、わが國の古典文學の間に流れてゐる。

蕪村は又しばしば公卿公達や、さういふ平安時代の情趣を吟じてゐる。妖怪趣味と王朝趣味、そこに蕪村の日本的な風格が見出される。

蕪村は、蕉門の末流に抗して、蕉風の正統なる句風を昂揚し、芭蕉に歸ることを一つの理想とした。京都に芭蕉庵を再興した彼である。芭蕉は又宗祇を尊敬した。

自然蕪村も亦宗祇を思はざるを得ない。

宗祇我を戀ふ夜眉毛に月の露を貫く

蕪村の作品には、あまり旅情を思はしめるものがないが、蕪村も亦、漂泊の旅に長い間流浪してゐるのであつて、それは、わが國のすぐれた詩人の背負うてゐた宿命であつた。

最後に、禁城に近く住む彼の感懐をあげて、一層その民族文學の意味を明かにしておく。

禁城春色曉蒼々に

青柳や我が大君の草か木か

三十一、瀧澤馬琴

寛政三奇士の一人瀧澤君平は、瀧澤馬琴と親交があつた。馬琴は君平を傳して「蒲の花がたみ」を書いてゐる。君平が山陵調査の爲め京都に赴いた時、知人とても

ないので、歌人の小澤蘆庵をおとづれた。蘆庵は、歌壇の一方に聳立した人、江戸の賀茂眞淵と拮抗して京都の歌界を守り、眞淵の舊派攻撃に對しては、舊派の牙城たる京都において、舊派の保守的觀念を漸次革新的方面に轉じさせようと努めたのであつて、自然眞淵とは相反する立場に立つてゐた。此の蘆庵の影響を受けて、その説を一層敷衍徹底せしめ、新しい自己の革新説を作り上げるとともに、江戸の眞淵門流に對し、はげしく反抗したのが香川景樹であつた。

かういふ文學史上の位置にある蘆庵を君平は訪れて、その家に寄寓し、山陵調査の業を十分に遂行することが出来たのである。君平は、終日古陵を調査して、日が暮れて歸るのが常であつた。然るに蘆庵は、君平の勞を癒す爲めに、自ら風呂をたいて、君平に入浴をすゝめたのである。もとより君平は、心苦しきあまり、懇切に斷つたが、蘆庵は、これらの事は、ひたすらに客を愛する故のみならず、吾も亦、かゝる奇人に宿する事の歡しさに、足下の疲勞を慰めて恙なかれと思ふよしは、國の爲めに力をつくす人の助にならんとてなり。必ず辭退し給ふなと云つて、これを繼續

した。

ある日、深更に君平が歸つて來たので、蘆庵は夜遊びをすると誤解して、君平を誡める所があつた。所が、君平はこれを聞いて形をたゞし、その日、等持院の尊氏の墓の前を通つたので、年來の恨心頭に起りて堪へられず、墓に向うて罵るやう、梟臣尊氏なほ靈あらば今いふ事を慥に聞け。汝は一旦治まりたる建武重祚の世を亂して、逆に取り逆に守りし毒を後世に流せしより、二百十數年干戈治まらず、國の舊典もこれが爲めに焼け亡び、王室も亦これによりて卑しく、古帝世々の山陵すら迹なくなりて、吾等にさへ飽くまで物を思はするは、皆悉く汝が罪なり。天罰まさに知るべし」と云つて、杖で石塔を思ひのまゝに打ちたゞき、歸途興奮のあまり酒を飲んだが、蘆庵に叱られることを憚つて、酒の酔をさますうちに、夜が更けたのであると辯解して陳謝した。蘆庵はこれを聞いて、自分も同様の經驗があるとして、江戸時代初における歌壇の異端者木下長嘯子の墓を冒つて打つたことがあると語り、兩人ともに大笑した。

以上は、馬琴の記した所によつたのであるが、此の馬琴の筆によつて、右のやうな兩人の逸話が、それぞれの性格を現すものとして、世に傳へられることを得たのである。さうして、舊派の系統を引く蘆庵が、新しく自由な歌を作つた長嘯子を罵つたのは、故あることであるが、君平の行爲に至つては、それよりも以上に重大切實な意味がある。青年客氣の徒の行爲とは違ひ、山陵調査に一生の精魂を打ち込んだ君平にして、はじめて此の行爲は意義を生じるのである。さうして、更に、此の君平の行爲を筆によつて傳へた馬琴の物語は、馬琴自身の思想を表明するものとして、意義を持つことにもなる。「修靜君平の號特に強飲醇酌劇談放言して讓らず。その體たらく傍若無人に似るといへども、方正鯁直の性、言外にあらはれて、國を憂ふる心、一日半時も撓むことなし」と賞揚して、君平の眞精神に觸れる所があつた馬琴なのである。

尤も、馬琴を目して、勤皇思想家、その明確なる目標のもとにある作家であるといふのではない。たゞ、社交嫌ひで、つきあひの悪かつた馬琴が、君平とかやうに交際

があつたといふ事實と、その君平の憂國の至情と行動とに共鳴し、少くとも同情の念の禁する能はぬものがあつたといふところに、天明時代から文化文政、乃至天保時代に於て輩出した作家と異なる彼の精神を見ることが出来るのである。

里見八犬傳は、わが國最大の小説である。その他の馬琴の作品を見れば、いづれも長大の作であり、更に大小の作品を無數に執筆してゐる彼は、作品の量を以てしても、前後に匹敵を見ない精力的な大作家である。そして、その内容に至つては、時代の大勢に影響され、順應したものであるとしても、とにかく、勸善懲惡主義といふ一つの思想傾向を明かにし、且その精神を具體化することに終始かはらぬ努力を拂ひ、加ふるに結構布置の妙の、群小作家が企圖すべからざる變化と統一を保つ點において絶大な質を、その量の上にかね備へるものであつた。

わが國の作家の多くが、弱々しい感性的傾向の作品を創作するごとく思はれてゐる中であつて、ひとり馬琴のみは、意力的な作家であるといふ感を與へる。意志的、精力的な、此の巨豪は、わが國の作家としてはめづらしい存在であるが故に、むし

ろ、民族文學の一豪傑たり得るのである。

三十二、平賀元義

萬葉集の直情的な格調、純朴な表現、誠實な精神は、一度は源實朝によつて、更に幕末にいたり、良寛や平賀元義等によつて、その甦生を見る事が出来たのである。もとより、これらの復活は、それぞれの時代的意義を負うてゐたものではあるが、しかもその時期が、時代の變革期に屬してをり、その時に當つて、此の萬葉調の再現を見たところに意義がある。平安時代の泰平期が、平安末の武家の興隆によつて醸し出された擾亂の時期を経て、鎌倉の源氏幕府の存立も亦危機に瀕してゐた時に、實朝の萬葉歌は出現したのである。江戸時代の昌平期は、歩一步末期的象狀に追ひこまれ、徳川幕府が次第に權勢を薄くして行く時、再び文藝の世界では、萬葉歌が力強く、地方の野にあつて、輝く開花を示しはじめたのである。

良寛は越後の僧である。平賀元義は岡山の藩士であつた。しかも世俗からは

なれた風格において、超俗的な生活において、此の兩者には共通する所がある。又一方において、良寛は飄飄淡淡たる風懷に特色があり、元義は激しい情熱に燃える性格を持つてゐた。さうして、直情勁行眞實心の流露において、遂に童心に歸る所は、また兩者の歸一する點であつて、かくて純朴なる萬葉集の精神の顯現が、おのづから認められる事になる。萬葉調の甦生は、かくのごとく、時代と人間と、二つながらその所を得て、存在の意義を持つ事が出来たのである。時代が人間を生み、人間が時代を生きぬいたのである。此の人間が、日本國民であるべき事は、いふまでもない。

良寛は逸脫の趣において高風が認められ、高雅な格調の作が多いが、力強さにおいて、は乏しいと云はなければならぬ。併しその中には、

ますらをのふみけむ代々の古道は荒れにけるかも行く人なしに

の如き、慨歎の情をもらしたやうな作も稀にはあるが、此の悟り切つたやうな禪僧の作として、此の慷慨の表出は、めづらしいものである。

その他、題義士實錄末と題された

捨生取義古尙少、況又四十有七人、一片忠心不可轉、令人永思元祿春

の詩などにも、その思想はうかゞはれるのであるが、多くは、孤獨に堪へて寂寥の生活の中に、心境を澄まし鍛えて行かうとした、此の風雅の高僧に、これを求めるのは無理であらう。

それに比すると、元義の方が、はるかに凡俗の人間に近く、従つて、人間的煩惱を多分に持つとともに、時代にも觸れる所が少くないのである。「わぎ妹子歌人と云はれるほどに、異性を歌つた元義であつた。しかも、時代の風雲に激發されては、國民的感情の昂揚するを禁ずる事の出来なかつた元義であつた。「から船」と題して

大君の御稜威かがやく日の本にたはわざするなおそのから人

と歌ひ、亞墨利加の軍の大將へろりと云ふ者、おのれと同じ年也と人のいひければ」と題して

年こそは同じくあらめ軍せばへろり男に豈負けめやも

と歌ひ嘉永七年西の戎どものせめくるよし女童どものいふを聞きて」と題して
えみしらは知らずやありけむ靈ちはふ神と君とのいます此の國を
と歌つてゐるのである。さうして

八島國國の御神の荒靈みさけびまさむ時近みかも

さひづるやから國人に日の本の手並示せよますらをのとも

と慷慨の情を歌ひ上げて、防境に赴く知友を激勵してゐるのである。此の元義が、楠
正成を歌つて

武夫のたけき鏡と天の原あふぎ尊め丈夫のとも

と、藩藉を脱してゐても、武士であつた自己の武士的感情を托し、兒島高德を歌つて
は

大君の御楯とならむ丈夫の鏡とすべき人ぞこの人

わが大君ものな思ほし大君の御楯とならむ我なけなくに

と一片歌歌の情を訴へてゐるのは、極めて自然である。

元義個人としては、殆ど中國地方以外の郷土を遠く出ることなくして過ぎ、幕末
擾亂期に當つても、憂國の情を行動に移して、實行運動をなすことなく、詩人的生活
に終始したのであるが、しかもその作品は、君國の眞實に徹した感銘を長く國民に
與へるをもつて、萬葉集の眞の精神を生かした民族文學たり得たのである。

三十三、新井白石

學術の研究に、藝術の創出に、全身の魂を打ち込んで、一途に生きる人々の精神力
は尊いかぎりである。併し又一方では、博學な知識を養ひ、天才的な情熱を藝術に
燃やしながらか、しかも國家的な問題、政治的な行動に身を挺して、そこに人間の生き
る道を見出した人々の實行力も亦尊敬せられなければならぬ。さうして此の二
途が二途ではなく、一個の人格の中に、たゞ一途の道として生きてゐる時、その一方
の成功は又他方の成功にもいたる道であつて、此處に二つながら美事な完成を示
す事も出来るのである。かういふ人物こそ、眞に偉大なる文人と稱する事が可能

であらう。

さういふ意味での、近世の偉大なる人物の一人に新井白石がある。白石は學者であり藝術家であり、同時に又爲政家でもあつた。元祿より享保にいたる間、白石の最も活動した時代は、民間にあつて、近松門左衛門の傑作が、數々生まれ出でた時代であつた。西鶴も芭蕉も契沖も、少し以前に此の世を去つてゐたが、これらの文人がいづれも時を同じうして輩出した元祿時代こそは、上古萬葉の時代に次ぐ、文化と文學との日本的な充實を見た時期である。平安時代の一條天皇時代にも亦同じ現象を見ることが出来るが、それは女性的性格において、これらの男性的な性格と對比をなすものであつた。

白石の作品は、折たく柴の記において、その最も高きものが認められるのである。齡六十に達して、追憶の記を書いた此の書は、自叙傳文學として、平安時代の女性の自叙傳たる日記文學と異なる一個の文學様式を創出したものである。その意味でも、白石はまさに創作的な天才に恵まれた藝術家である。さうして、此の書には、白

熱烈なる經世の志と、正義を尊び國家を愛する純情とが、雄勁なる筆致を以て表現せられてゐる。

その中には、當時の武家の皇室に對しまつる位置について、白石の考を示した上の事ながら記されてゐる。それは、外國人がわが國に對する時、天皇の御事は、日本天皇と稱しまつり、武家即ち將軍の事は日本國王といふ例であつた。然るに、その後日本國大君と改め稱する事が、寛永頃からの例となつてゐたのを、白石は日本國王の舊稱に復したのである。それは、大君といふのは、外國では、臣下に授ける職名であり、又わが國では、天皇の御事を大君と申し上げるのに混同するから、日本國王といふ事にして、公家の御事には、係るに天を以てして、日本天皇と稱しまゐらせ、武家の御事には、係るに國を以てして、日本國王と稱しまゐらす事は、おのづから天と地と其位易ふべからざる所あるが如しといふのが、白石の解釋であつた。此の白石の解釋によれば、「皇」と「王」との用字の如き、輕々に使用を誤たざる所以が明かであるが、しかも將軍家に仕へてゐた白石が、遂に將軍を目して日本國

王と稱さざるを得なかつた所に、武家の置かれた位置の限界があつた。此所から抜け出る運動が次第に時代を下るに従つて活潑となるのである。

白石の本領は歴史家であつた。その史論は、まさに慈鎮親房と並んで、それ以來の地位を占めるものである。讀史餘論は、史眼の精到にして鋭く明かなる、まことに當代獨歩の著である。白石は高氏を以て叛臣と斷じ、朝敵と稱し、功臣は於テハ正成ヲ以テ第一トスと論じてゐるのである。

白石は爲政家として、廣く内外の狀態を察し、殊に遠く歐羅巴の新しい事物について、又その現在のさまざまの狀態について知ることに努力したのは、その正しい識見を見ることが出来る。かくて西洋紀聞、采覽異言の二著は、わが國に紅毛諸國を紹介した最初の書と云つてよい。正しい史眼は眼界の廣い比較研究によつて養はれるのである。

白石の學績を語るには、なほ國語語原學について、國語學史上確固不拔の地位を築き、軍器その他の考證、や上代文化の研究、又兵法の研究等において、歴史學上に重

要な結果を示してゐることなどをあげる事が出来る。

しかしそのすべてを含めて、學問が白石の政治家としての功業、治績に甚大の弘益を與へ、史眼が政治の運用に、底力のある役目を果してゐるところに、その偉大さが認められるのであつた。白石においては、學問と行動とは、一つであつて二つではなかつた。理論は遂に實行でもあつた。かやうにして、此のすぐれた學者は、政治家として國家に役立つことに、やぶさかではなかつた。此の行き方が、わが國の文人の一つの生活態度でもあつた。藝術は又行爲でもあつたのである。西行や長明の生き方にも同じ意味の事が見られる。それと異なる方向に向つては、わたが、白石の取つた道は、結局、わが民族文學に負はされてゐた運命の道でなければならなかつた。これからさうした人々について考へて行きたいと思ふ。

三十四、賴山陽

賴山陽は旅行を好み史蹟を周遊した。かつて「過櫻井驛址」こぎて詩作を残して

ゐる。

山崎西去櫻井驛

傳是楠公訣子處

林際東指金剛山

堤樹依稀河内路

此所で、山陽は往時を回想して楠氏の運命に思ひ至るのであつた。さうして

既殲全躬支傾覆

爲君更貽一塊肉

といふ悲壯な楠公父子の最後の奉公を歌つて

脈脈熱血灑國難

大澗東西野草綠

と力強くも痛烈な文字を綴つたのである。

山陽は、日本外史でも云つた。「余數攝播の間を往來し、所謂櫻井驛といふ者を訪

ひ、之を山崎の路に得たり。一小村のみ。過ぐる者或は其の驛趾たるを省みず。

余是に於て低回して去る能はず、顧みて金剛山の雲際に巖立するを望み、公の義を擧ぐるの秋、及び其の子孫の據りて王室を扞護せしを想見するなり」と記して來たのは、まさに、右の詩の註脚となつてゐる觀があるが、山陽は、その文中、楠公を以て「その勤王の功は、余楠氏を以て第一と爲す」と稱し、「餘烈の及ぶ所、獨りその子孫のみならず、公卿にまれ、將士にまれ、各々弓箭を執りて、以て王事に勤むるは、概ね皆楠氏の風を聞きて起る者なり。嗚呼楠氏の如きは、眞に武臣の名に愧ぢずと謂ふべし」と斷じてゐる。

さうして、更に溯つて、武家の興隆に關し、「吾將門の史を修め、平治、承久の際に至り、未だ嘗て筆を捨てて嘆ぜずんばあらざるなり。嗚呼世道の變、名實の相讐らざること一に此に至るか。古の所謂武臣は王に勤むと云ふのみ。源氏平氏の如き皆然らざるは莫し。平治の後に至りては綱維の弛めるに乗じて、以て鴟梟の欲を逞しくす。暴悍にして忌むなき者有り。雄猜にして測られざる者あり。爲す所

同じからずといへども、而もその王憲を蔑にし、私利を營むは一のみ。然れども猶言ふ可きあり。曰く、王族なり、將家なり。北條氏に至りては、將門の屬隸を以てして、坐ながら朝廷を制す。天下の事、復言ふに忍びざるなり。君臣の別明かなるに、將門の亂以來、次第に武士が擡頭して、遂に專横を擅にし、承久の亂に至つては、北條氏の暴威遂に、天皇を遷幸し奉る大逆を取てする所、武家の驕慢は極まつた。山陽は此の點を指摘して、慷慨の情、悲憤の言、紙面を覆ふものがあり、「況んや君臣の實際寧ぞ曲直を較ぶ可けんや」と切言して、臣道を正してゐるのは、讀者をして歴史の批判の基準を覺らしめる所が尠くない。史論の根本は大義名分を明かにする點に價値があるとすれば、山陽の史眼の如き、最も此の根本の問題に觸れてゐるのである。

「功臣ニ於テハ正成ヲ以テ第一トス」と云つた白石の言は、山陽によつて「その勤王の功は、余、楠氏を以て第一とす」と受け繼がれてゐる。山陽の心は、白石に通ふものがあつた。しかも白石の冷徹、精到な史論は、山陽の情熱と果斷とを得て、一段

の精細を加へ、一層の發展を見る事が出来たのである。白石は内に信念の火が燃えつゝも、外にはなほ冷靜な學者的風彩を失はなかつた。山陽は、その鬱懷を外に發散して憚る所なく、頗る詩人的性格を天に稟けてゐた。かくて史論の表現の手法に相違があるとしても、その史觀の根本の態度においては、もとより共通するものが認められる。しかも、遂に時代を溯る白石の史論よりも、時代の近接した、さうして熱烈な筆を振つて人心の歸趨と、時代の動向とを明かならしめた山陽の史的眼光に、時代の鼓舞されるものが少くなかつた。維新の大業に志す士は、山陽によつて、その歴史的地位を自覺させられた所が多かつたのである。

且又、その日本外史が、水戸の大日本史より得る所多きを思へば、皇室中心を國本とする事を明かに示した水戸學の波濤の次第に廣がり來るを見る事が出来る。まことに山陽は、光圀と白石との精神を詩人の直觀を以て綜合したものであり、そこから時代を鼓舞する力も湧き起つたのである。光圀も白石も將軍の直臣として、なほその言説には限界が設けられてゐた所を、一介の詩人たる山陽は既に脱し

ようとしてゐる。かくて武家の非を聲高く鳴らす事も出来た。淺野家の藩儒の家に出たとは云へ、山陽は、光圀や白石の生きてゐた時代や地位に比して、頗る自由な立場に置かれてゐた。

既に時代は文化文政時代に下つて、維新の曙光が次第に近づきつゝあつたのである。人々は山陽の言辭を目して狂としたが、山陽の作品に價値を發見したのは、實に名宰相と稱せられた白河樂翁その人である。花月草紙その他多くの著を以て和歌に隨筆に、その藝術の才能を伸ばした樂翁は、山陽の史論に心からの共鳴を感じた。樂翁が賀茂眞淵に教を受けた田安宗武の子なる事を思へば、藝術の血と上代復古の精神とは脈々としてつながり流れるものあるを覺える。此の人が山陽と相知つたのである。山陽も亦、樂翁公に上る書を草してゐる。英雄を知るは英雄であり、詩人に共感する者も亦詩人であつた。

三十五、佐久良東雄

國學の四大人は、荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤を稱する。さうしてこれは篤胤の門人の間に云ひ出でられたことであるが、まことに江戸時代の國學思想の流れは、此の四大人を根幹として歴史が形作られるのである。さうしてその中においても、取りわけ民族文學の方面に偉大なる貢獻があつたのは、眞淵、宣長の兩大人であり、神道に不朽の業績を残されたのは篤胤であつた。平田神道の思想は現代の神道的理念の中心たるべきものである。

此の篤胤の門下の一人に佐久良東雄があつた。東雄は常陸の出生、もと僧侶として一寺に住職たりし人であつた。師の康哉は、僧侶にめづらしく國學に詳しく、志は皇道を闡明にするにあつたといふ。此の師に薰陶を受け、早く萬葉集を授けられて、みづからも和歌の道に進む心を起したのである。東雄自筆の萬葉和歌抄さへ傳へられてゐる。

かくて遂に僧籍を脱し、還俗して佐久良東雄と稱するに至つた。さうして、常陸國の式内社の巡拜を志し、又藤田東湖が水戸家へ仕官を勧めた時には、これを拒絶